

えた軍事費論のやうな、世人を驚嘆させると同時に世人を説得しなければ已まない——もちろん學を曲げての阿世でもなく、輕卒な政治的ゼスチュアでもない——公債論が欲しいのである。行動の妨げとなり、飛躍の踏み切り臺になり得ない科學的分析は、學問が宗教を失つてデカタンに墮した悲惨な姿である。我々は、眞に科學的な分析を、自主的に使役して、一切知的眞理の門に廻向させなければならぬのである。一昔前、インフレは必然なりや可能なりやの論争もやましかつたが、我々はあくまで、科學の格物一面性を理解してかからねばならないのである。

私はここには、インフレ理論や公債發行の國民經濟的限度といふやうな難つかしい問題を取りあげることを差し控へて、副題目に示したやうに、公債をどうしたつて買はなければならぬ國民の心的態度に、一つの示唆を語つてみたいと思ふのである。

思ふに公債の不入氣は戰爭の前途に對する杞憂と並行する。戰爭が首相の議會での説明のやうに「絕對不敗」、「絕對に勝利確信」であるとすれば、公債の前途には「絕對安心」があつて然るべしであらう。また事實絕對にさうさせなければならぬ我々である。戰爭に負けたら元も子もないことは何人も熟知してゐるところであらう。梵鐘取り上げの發頭人である企畫院の柏原氏が、京都に諸本山の名僧たちを集めて、「戰爭に負けたら元も子もないのです。チンモコモコもボンボンも、戰爭に負けたらあつたものじやありません。一切は戰爭に勝つてからです。戰爭に負けたら南無阿彌陀佛の稱號も許

されないので。どうか英靈の冥福のために梵鐘を應召させて下さい」と衷情を披瀝して訴へたといふが、正にその通りであらう。「戰勝の曉には東京に駐兵して日本人を永遠に慘苦の底に呻吟せしめなければならぬ」と公言して憚らない彼等である。戰爭に負けたら、公債も株券も買溜もあつたものではない。現金を持つてゐたところと同じである。同じどころか、戰爭に負けて米兵に日本駐屯を許すとなれば、良い物をもつてゐればゐるほど、掠奪や虐殺の對象とされる。かといつて、資本の逃避は絶対に許されない今日である。然りとすれば、我々は何か何んでも勝ち抜かねばならないのである。そして現に立派に勝ち抜きつつありとすれば、大商人が大事業に大成功しつつあるのと、經濟的には同じである。現に我が國の支配下に入りつつある南方諸地域は實に尠大であり、その資源は世界無比とさへ讃へられてゐる。これらの諸地域の經營さへ宜しきをうるならば、五百億や六百億の公債の見返りは十二分に可能である。若しそれが出來なかつたら、日本の危急存亡の秋である。公債や株券などの問題どころではない。私も經濟學の領域に身をおくものであるからには、資源性の何んたるかも、インフレの理論も心得てゐる。しかし俗にいふやうに、石に嚙りついても、借金を質においても、勝ち抜かねばならず、經營し抜かねばならない今日である。然りとすれば、遮二無二占領地域の諸資源を以つて數百億の公債の裏付けをしなければならぬことは言ふまでもない。現にそれをなしつつありとすれば、公債のみが繼子扱ひされる理由もない。

人は言ふかも知れない。公債が確實有利なものになる時には、株券はもつと有利になるであらうと。しかし株券が法外に有利になることは當分望めない。そこに統制經濟の妙諦があるからである。公債を不利に残しつつ、利潤を無制限に放任することは絶対にない。利潤の利子化は學問的にも承認され、世人は企業的所有よりも株券の所有を考へてゐる。日本人は投資よりも、貨幣を確實な姿で保存することを好む傾きが多い。株主の發言權は極度に制限せられて、株主總會の意志は輕視せられる。それがこれからの方向であり、現に特殊法人のなかにはそれがある。日銀然り營團然りである。然りとすれば、公債よりも特に株式所有を選ばなければならない理由はない。而して、株式會社の存亡が國家の存亡よりも更らに極めて甚だしいに於いては尙更らである。日本帝國に關する限り我々は八紘にかがやく隆盛のみ知つてゐる。これに反して一株式會社の隆替は極めて甚だしい。我々は何を好んで今後の日本に、株をのみ買つて公債を持たずにゐるであらう。ことに、南方占領諸地域の經營資金に、公債が利用されないと誰が保證し得よう。現に、南方においては軍票一色となつてゐる。これと内地圓との連絡が南方開發金庫によつて行はれてゐることは、何人も知悉してゐるところである。そしてこの金庫の資金が軍事費（即ち公債）によつて供給されてゐることも周知の事實である。そしてこの軍票が、一方において、南方の諸資源によつて力強く裏付けされてゐることも、見逃し得ない事實である。然りとすれば、將來の南方開發諸會社の資本が、軍票によつて行はれ、公債によつて行はれる可能も決してなしとはしない

であらう。經濟的にさうしなければならぬ論理的必然はないとするも政治的にそれが絶対に行はれない、また行はれてはならないといふ理由はないであらう。公債價値の維持策としては、「南方諸會社の資本拂込は、公債によるべし」といふのは、蓋し最善中の最善とも考へられよう。若しさういふ可能を考へるとすれば、公債の前途ほど明朗洋々たるものはなくなるであらう。この時に至れば、株式の利廻りも相當に有利にはなるであらうが、公債が今日の如く何か陰鬱な待遇をうけることは絶対になくなる。また絶対にさうさせないところに統制經濟の意志があるのである。

思ふに、公債の不安は、過去における敗戰國の公債のみ思ひ浮べるからではなからうか。公債の恐しさと悪性インフレの典型を、我々は常に、昔のドイツとロシヤにみる。これらは敗戰の諸國であり、佛革命當時のアッシニヤも政治的脆弱のみられた時から特に急激に價値下落を行つてゐる。インフレで國が亡びるのではなくて、政治がうまく行かなくなるとインフレは悪性化すといつた方がよいかも知れぬ。（インフレの政治に及ぼす作用を決して無視出來ぬが）。しかし、一般人のなかには、インフレで――而かも必然論的インフレ抽象論で――國が亡ぶるごとくに錯覺してゐる人も相當ある。それは、戰爭に負け、國の亡びかけた國のインフレ現象を、典型として見すぎるからである。而かも、その典型をマックス・ウェーバーのやうに謙虚に見ないで、それに萬能を賦與して、無限定の現實を惡魔的に限定せしめてしまふからである。まさに惡魔が骸骨のとりことなつたと擲揄さるべきであらう。

そこで、例を發展期の英國にとつてみるならば、人はその思はざりしに驚くであらう。英國にも勿論恐慌もあつたし、公債の値下りもあつた。「然しロンドン人何人も英蘭銀行の信用を彼れ此れ云ふといふやうなことは、未だ夢にも思はないし、また英蘭銀行も己れ自身の信用が危険に瀕してゐるとは、全く夢にも思はないのである。……政府が英蘭銀行の直ぐ背後について居て、必要のある時は之を援助するといふ普通一般の確信が確認されて來た。英蘭銀行が解散されるといふやうなことは、未だ曾て考へたこともない。大抵の人は其れよりも先きに寧ろ英國を解散することを考へてみるであらう」(宇野譯「ロンドンボード街」岩波文庫版五一―五二頁)とバジョットがいふやうに、英國人は未だ曾て自己を懷疑したり自嘲することはしなかつたのである。「コンソル公債なら日曜日にも賣れる」(同書七〇頁)といはれるやうに、永久公債化した整理公債は、英國金融界のパロメーターにさへなつてゐるのである。このコンソル公債が、一七五〇年以後如何なる種類の公債を何程含んでゐるかは、ここに詳述し得ないが、英國は十八世紀の後半から約百年間まつたく休む暇なく戦ひつづけることによつて、今日(否、昨日まで)の偉大を獲得したのである。その偉大を勝ち得るための戦費も相當澤山に、この公債のなかに含まれてゐる。別言すれば、ナポレオン戦争前後から英國は海外に著しく領土を獲大したが、そのために要した戦費は全部公債で賄つて、全部獲得資源でこれを裏付けしてゐるのである。見返へりさへ出来れば、公債は單なる増發の故に値下りは來さない。日本の公債増發も、生産力を一定とすれば、危険である。戦時

生産がともすれば擴大再生産の困難を伴ふことは、衆人熟知のことからであるが、さらに思はねばならないことは、生産力の何たるかである。人はとかく生産力を物的數量的に考へ易い。フリードリッヒ・リストの生産力概念を靜かに見よ。精神的部面の非常に強調されてゐることに驚くであらう。愛國と忍苦と研究に燃え盛る日本國民の生産力を、何んで物的數量的に把握し得よう。この把握されないところに、いはゆる底力が今次の臨時議會において戦力の大躍進となつて發現し、已に南方諸地域の獲得によつて、生産力が戦前に比して數倍數十倍になる物的可能を現實に與へられてゐるとするならば、公債増發に徒らに戦く理由は毫もない。公債増發といふ言葉に徒らに戦くのは、抽象的理想型理論を以つて現實を割り切らうとする巧智的錯覺か、然らずんば薄の穂におづる落武者に等しい。我々は勝つてゐるのである。英國以上の偉大を今日我々は自負してゐるのである。公債の大きさが國家の偉大と個人の富裕を示す夜明けが來てゐるのである。またさういふ黎明をこそ持たなければならぬのである。重ねて言ふ。その夜明けのない時は、何を持たうと持たぬに等しい。黎明さへ持てば、公債こそ持たるべき最も安全確實なるものであらう。さらに、我が國は、他所の何れの國家よりも、古來貨幣や公債について幸福な歴史を持つてゐる。

支那人は貨幣がだめになると平氣で言ひ、駄目になる貨幣から逃れるためにあらゆる方策を憚りなく講じてゐる。彼らは貨幣の駄目化を深刻に體驗し來つてゐるからである。錢耗了といふ言葉がそれを端

的に示してゐる。我々はこれと全く違つて國家の貨幣を素直に信頼し、これを大切にし、勿體ない取扱ひは絶対に慎しんで來てゐる。さうだとすれば、公債がむやみに毛嫌ひ或ひは不安視される所以は毫末も存しない。それどころか、公債こそ國民の擧つて買ひ求むべきものともならう。一つには偉大なる國民の象徴として、一つには民族の生命と哲學をかけての大戦争に勝ち抜くために。盲想のやうであるが、かういふことを教へる雄渾潤達なる公債論が、少くとも政府筋あたりからは堂々と發表されて然るべきやうに思はれる。逞しいものこそ美しいものである。そしてまた今こそ、單なる根本概念の修正ではなしに根本的に概念しなほすことが必要である。(新東亞經濟、昭和十八年七月號所掲)

後篇

統制經濟に關する一考察

統制經濟、あるひは計畫經濟といふ言葉が、いろいろの概念をもつて語られてゐる。外國に於ても、或は *Economie dirigée* とし、或は *Planwirtschaft*, *gebundene Wirtschaft*, 或はまた *economie planning*, *planned economy* 等々とし、それに *capitalist*, *socialist*, *collectivist* などいふ修飾語さへ附加されてゐる。又 *control of industry*, *national planning*, *pseudo-capitalism* などいふ言葉も用ひられて、數へあげれば全く應接に追がない。社會主義といふ語がそれを語る人と同じ數の意味をもつといはれる様に、統制經濟または計畫經濟といふ言葉も全く百人百様の意味をもつてゐる。私がここに統制經濟の概念規定を企てるのは、或はただ單にこの困亂にまた一の困亂を加へるの愚を繰り返へすに止るかもしれない。併し私もまた群人の中に加つて象の一面をなでてみる。

先づ私は統制經濟及び計畫經濟といふ兩語を峻別して用ふることにする。といふのは、兩用語の混用

が、現實經濟の認識、分析、並に正確な認識に基かねばならない經濟政策に、甚だしき偏倚と誤謬とを招來するからである。結論から言へば、私は、資本主義體制に於ける計畫され、統制された經濟 (Planning under capitalism, capitalist economic planning) を統制經濟といひ、計畫經濟なる語は、之を、社會主義體制 (planning under socialism, socialist economic planning) にのみ用ふることにする。別言すれば、ロシア或はそれに類する將來社會の經濟を計畫經濟と言ひ、現在の日・獨・伊・英・佛・米等に行はれる組織化され、合理化された資本主義經濟を統制經濟と私は呼ぶ。

私がかかる恣意的な用語法を取てするのは、一に統制經濟の歴史的性格を明確に浮彫したいからに外ならぬ。統制經濟には統制あり、故に統制ある經濟は凡て之れ統制經濟なりとして、ギルドもマーカンテイリズムも幼稚産業保護の貿易政策もみんな統制經濟だといふ論者がある。併しそれでは、「逆は必ずしも眞ならず」の論理を借りる迄もなく、統制經濟の統制經濟たる所以は、把握されえない。統制經濟といふ言葉のもつ魅力と新鮮味の中に何らかの歴史的意味があるのではあるまいか。兩用語の混用並に兩用語と戰時經濟との混用が、種々の概念混同を齎らしてゐる有様を指摘してみる。我が國現在の所謂統制經濟を、戰時經濟と認識するか、それとも計畫經濟と言ふかによつて、諸々の問題が、特に政策方面に於ては深刻に提起せられる。戰時經濟については後述する故に、統制經濟と計畫經濟との概念規定のみを問題としよう。一例をあげる。我が國の統制經濟を計畫經濟と呼ぶことによつて齎される最初の

誤謬は、ソヴィエト經濟が思ひ浮べられることによる大なる恐怖又は大なる期待であらう。恐怖するものも期待するものも共に次の様な二つの誤謬を犯してゐる。先づ第一に、計畫といふ文字に餘りにとらはれすぎてゐる。經濟に計畫性あるが故に計畫經濟といふならば、何ぞロシアを待たん。我々の日常の經濟は凡てこれ計畫經濟であらう。我々の合理的な經濟行動は、限界效用均等の法則に従つて實に見事に秩序づけられ計畫づけられてゐるのである。「嚴密に言へば、凡ての經濟生活は計畫を内包してゐる。經濟活動は稀少財の處分を意味する活動である。そして稀少財の處分は、それが合目的である限り必然的に或る種の計畫を含んでゐるのである。……計畫するといふことは目的を以て行動することであり、選擇することである。そして選擇が經濟活動の本質をなしてゐるのである。」といふロビンズの言に耳をかすならば *die wasserigen Wasser* といふ皮肉こそ、正に、計畫といふ文字にとらはれすぎ

る人々に與へらるべきものとなるであらう。

第二の誤謬は彼らが「資本主義第三期」といふ言葉にとらへられてゐることである。此の語が資本主義の死滅を願ふ人々によつて、その念願成就の呪文として唱へられたものであることは、蓋し想像にかたくない。彼らがこの呪文を極めてあらたかなものと信奉するのは當然であるが、資本主義の永存を希求して彼らの誤謬を指摘するに極めて鋭い人々迄が、とかくこの呪文にしばられて「第三期的」な考へにとらはれやすい。獨占資本主義は資本主義最後の段階であつて、次に來るべきものは社會主義的なもの

のでなければならぬといふのがその論理である。一方は大なる期待を以て、他方は大なる恐怖を以て、この論理でものを考へる。こうした考へ方が、極く最近迄一の社會的通念となつてゐたことは事實である。併し、なぜさう考へて了はねばならないのであらう。ピルーが言つてゐる様に、嘗て如何なる經濟學者も社會思想家も豫言しなかつた所の統制經濟なるものが嚴然として現存する事實を思ふとき、私は公式的な「第三期」觀から遠のかざるを得ない様に思はれる。そしてそれは資本主義の永遠性を論證せんがためにではなくて、統制經濟の本質を把握したいからである。統制經濟をも「第三期」的現象の中に入れる人があるかもしれない。併し、若し「第三期」に種々の様相があつて而かも極めて長期に亘るものと言ふならば、呪文としての魅力は失はれる。又「第三期」を「世は末だ」といふ意味に翻譯して了へば餘りにも感傷的になつてその鋭い論理性は失はれる。

本位田博士は兩用語を全く同じ意味に用ひられて次の如くに言はれる。「(國家の)意識的規律に重きを置けば統制經濟となり、其の計畫性に重きを置けば計畫經濟となる。歐洲に於て計畫經濟の名が寧ろ多く用ひられてゐるのは、統制經濟の眞價が計畫的となつて初めて發揮されるからであらう。我國に於ても最近政界に計畫經濟の聲が漸く高くなつた。それは現實には統制の中(三)に官僚主義の響くことを嫌つたせいでもあらうが、理論的には統制經濟の進展した事を現はすものである。戰時經濟はあらゆるものを計畫的にして之を合理化しなければならなくなつたからである」と。定評ある博士の力作(菊版四百

數十頁)の中から勝手に引用した右の短文について云々することは誠に非禮と思はれるが、併し右の様な考へ方が博士の著作全體を通じて見られる様に思はれるし、又かういふ考へ方が一般に流布してゐる様に思はれるので、敢て疑問を述べてみる。結局、統制あるが故に統制經濟、計畫あるが故に計畫經濟國防にも戰爭にも恐慌克服にも國民經濟の合理化・計畫化を必要とするが故に、計畫經濟といふのであらうか。そうだとすれば、己に述べた様に、言葉にとらはれた觀がある。又如何なる國家も國家である限り國策(national planning)を持つたであらうし又持つであらうことを考へれば、常に國家の意識的規律が國民經濟に向て必ず何らかの程度に於て作用することが考へられる。さすれば少くとも近代國家の成立以來國民經濟は常に統制經濟であつたし又將來もさうであらうといふ極言が生れうる。「自由なる市場經濟は無統制或は無計畫性によつて特徴づけられてゐる。けれども一步溯りて考へるならば個人(四)の經濟行爲が自由に發揮されうるのは、經濟行爲を自由放任せんとする共同意志或は國家意志が背後に動いてゐるからである。斯る意味に於て、計畫經濟の對蹠的存在と考へられる經濟も、亦計畫的な經濟に相違ない」とも言へるであらう。又計畫の性質を重じて戰爭遂行や恐慌克服のための一時的計畫といふならば、計畫經濟は餘りにも非常時的性格を與へられて了ふ。事實、博士は、非常時統制と平時統制とに分けて論じられ、前者に多くの紙面をさかれてゐる。そして平時統制の最初の且つ大規模の一例として、ロシアの第一次五ヶ年計畫をあげられるが、これも亦、革命成就のための非常時的統制・計

畫であつたのではあるまいか。

統制経済と計畫経済とを程度の相違と考へる人もある。私は、後に説明する様に質の相違と考へる。私は、現在日本の統制経済をロシヤ式の計畫経済への直接の漸移過程と考へたくないからである。

周知の様に、ランダウエル (O. Landauer) は拘束経済といふ用語を使ふ。完全なる自由の支配しない経済は凡て之をこの拘束経済といふ概念の中に含ませて了ふ。中世の利子禁止も、マーカント伊利ズムも、ギルドも、そして今日の統制経済も、ロシヤの計畫経済もみんな拘束経済といふことになるのである。我が國にも勿論これと同じ様な概念規定をする人々がある。一應尤もの様に思へるが、併しそれでよいのかしらといふ反問がすぐあとから起つてくる。どうすることも出来ないこの反問は、この考へ方が餘りに形式にとらはれすぎて、統制経済といふ言葉のもつ歴史的・社會的特殊性を抹殺して了つてゐるからであらう。私は統制経済を歴史的な概念として把握したい。そして又そうしなければいかんと思つてゐる。

註(1) L. Robbins, *Economic planning, and International Order*. 1937, p. 4.

(1) G. Prou, *La crise du capitalisme*. 1936, p. 199.

(三) 本位田祥男著「統制経済の理論」四九一五〇頁

(四) 松山茂二郎著「ソヴェト経済研究」一頁

二

私は前段に於て統制経済と計畫経済とを峻別して、前者を本質に於て資本主義的なものと考へると述べた。いま少しくこの點に關説してみよう。思ふに、自由主義経済の時代を自由放任即ち無規律競争の時代と考へるならば、獨占経済の時代は自主的統制即ち競争の合理化の行はれた時代であるだらう。そして單なる競争の合理化でなしに國民経済全體に或る合理化の必要の生じた時代が統制経済の時代ではあるまいか。資本主義が自由競争の段階から獨占の段階に漸移しなければならなかつた経済的必然性はゾンバルトによつて説明せられた通りであらう。問題は、獨占段階即ち自主的統制の段階に於て如何なる経済的理由から國民経済全體に合理化が必要となつたか、そしてそれが何故に統制経済即ち國家による強制的統制の段階に進み入らばならなかつたか、といふことである。獨占體はその發生の當初に於ては、資本主義的生産と消費の矛盾の集中的表現である恐慌を豫防乃至克服する魔力を持つが如くに期待せられた。併し、獨占體の各個獨立の計畫は國民経済全體の統一的計畫に基かないために、依然として無秩序と混亂とを結果するだけであつた。それどころか、獨占段階に於ては、資本は自らの統制組織を通じて自由競争を阻止することによつて、破壊された均衡を回復すべき自律性を喪失して了つたために、均衡回復のためには、獨占内部の自律的な力に依ることは出来ないで、否でも應でも外部よりの力

にたよらざるを得なくなつた。別言すれば、均衡の維持乃至回復のためには、統制自體の統制が必要となつて來たのである。そこで、從來市場經濟に消極的役割しか果してゐなかつた國家が、市場經濟の指導、經濟過程の管理のために積極的に出動せざるを得なくなつたのである。併しここに注意しなければならぬのは、かかる出動者としての國家は、經濟的行爲者としての國家であるといふことである。といふのは、國家が經濟機構の中に入り込むためには、國家自體が資本主義經濟組織内に於ける自己の地位に自覺しなければならぬのである。勿論至上的性質をもつものではなからうが、經濟にはやはり經濟自身の法則と論理がある。國家の出動もその論理の線に沿つて行はなければ、長期に亘つて効果的であることは至難である。若し國家の出動に大なる期待がかけられるとすれば、それは、國家の出動に經濟的自覺と經濟的論理があるからであらう。

然らば現代國家は何が故にかかる自覺と論理をもつのであらう。現代國家の財政が主として軍備費及び社會費を中心として莫大に膨脹してゐること、従つて購買力保持者として國民所得の構成者として絶大なる力を有すること、及び公的企業の活動領域が極めて廣きに亘つてゐること、従つて國家並に公共資本の社會的總資本に對する比重の著増してゐること等が、現代國家の大なる特徴であることは已に説明を要しない所であらう。そして國家の經濟的機能のかかる大發展が、國民經濟内に占める國家の役割を重要且つ壓力的ならしめてゐるのである。^(二)この國家の經濟活動の國民經濟に對する著大なる壓力こ

そ、國家に經濟的自覺と論理とを與へるものであり、そして又この著大なる影響力こそが均衡回復の神力として強く期待せられ、資本主義の側を漸次國家の經濟的管理に接近せしむる所以のものであるだらう。そして國家も亦、國民經濟とのかかる密接な關聯に於ては、經濟的行爲者として、失はれた均衡の回復に極めて強い關心を持たざるを得ないのである。國家が自ら積極的に乗出す所以である。市場の側に於ける國家の經濟活動に對する大なる期待と國家の側に於ける市場回復に對する大なる關心とが、相互求心的に、國家をして經濟過程への直接的管理者として登場せしむるのであらう。武村教授の言葉を借りれば、「國家財政の市場經濟に對する地位は參與的のものに過ぎなかつたが、今や國家財政の國民所得への參與の割合が量的に増大せる結果、國家はその歴大なる財政支出を通じて市場經濟の再生産過程を統制し、止揚された市場經濟の自動的景氣回復力に代つて、自ら景氣回復への『最初の刺戟』を與へんとする統制經濟段階へ移行した。それ故統制經濟段階への移行の根據は、獨占資本主義そのものに於ける自動的景氣回復力の止揚と財政の膨脹とにある^(三)」のである。

國家は、こうした經濟的理由の外に、或は福祉、或は正義、或は國防等々の觀點から、即ち國家自身の持つ國策の見地から、市場への干渉・統制、國民經濟の計畫化に乗り出して來ることも度々ある。ことに恐慌克服のための偶然的・一時的・部分的救済者としての登場は、自由主義時代からの慣習であつて、經濟過程に對する國家權力の干渉といふことは以前にも澤山にあつた事實である。今日事新しく統

制經濟といふ言葉が用ひられ、そしてそれに非常な新鮮味が感ぜられるには、その理由がなければならぬ。國家の干渉が直接的・積極的になつたとか、程度や範圍が大きくなつたといふだけでは、統制經濟の統制經濟たる所以を特徴づける理由にはならない。制統經濟の歴史的性格といふものは、前述の如く、獨占資本主義の或る一定の段階に於て、この獨占的組織を通して行はれる所の國家の經濟過程への直接的干渉といふ點にあるのではあるまいか。そして獨占資本主義のもたらして而かも解決しえなかつた經濟的・社會的諸問題を國家の手によつて直接に解決して行かうとする所に、統制經濟の革新的性質が現はれて來るのではあるまいか。政治が經濟をリードするとか、經濟の政治化とかいはれるのは、經濟的行爲者として國家が國民經濟の凡ゆる部分に壓力的に作用するといふことではあるまいか。

國家が、その有する理想或は必要から、國民經濟に如何なる干渉・統制を加へても、是認されねばならない理由があるであらう。そして今日の統制經濟の中にそうした要素が多く盛られてゐるであらうことも、そしてそこに經濟倫理が強調せられねばならぬことも勿論私は承認する。併し私は本稿では、統制經濟に於ける國家の活動を、經濟外的な何らかの超越的理念を根據としての上からの・或は外からの・經濟機構への干渉と理解せずして、經濟機構との内的關聯に於て之を把握したいと努めてゐるのである。私は巨大なる現實への接近の一の謙虚な仕方として、經濟といふ面から一應眺めてみようとしてゐるのである。

註(1) W. Sombart, Die Zukunft des Kapitalismus, 1937. S. 11-12.

(11) H. Laufenburger, L'intervention de l'Etat en matière économique, 1939. 及び F. E. Lawley, The Growth of Collective Economy, 1938. を参照。

(12) 武村忠雄著「統制經濟と景氣變動」三七三頁

III

私は右に述べた様に、統制經濟を、經濟機構への國家の(經濟論理的)介入による國民經濟構造の變化と考へて、資本主義に於ける統制段階或は統制資本主義として理解し、歴史的必然的過程として把握する。そしてその到來を、大體一九二九年の世界的恐慌以後と考へる。讀者の中には、統制經濟に於ける革新的要素を高く評價し、特に現在日本の戰時經濟的諸方法に強く刺戟せられて統制經濟を非資本主義と強調したい人もあらう。私はそれらの人々の社會的熱情に敬意を拂ふ。併し熱情を以て歴史を割り切ることは飽く迄冷静でありたいと思ふ。ここで統制經濟の生長とその性格、並に各國統制經濟の特殊性について私の考を述べるのが適當であらう。思ふに、均衡の破壊は、資本主義である以上その本來の性質から當然生じうべき問題である。併し之を如何に回復するかは、自由主義段階及び獨占段階に於てそれぞれ異なる。

已に述べた様に、以前の恐慌に於ては、國家は偶然的・一時的・部分的救済者として出動し、その方策は主として金融的救済であつたり或は社會政策的救済であつたりした。併し一九二九年以來の文字通り未曾有の大恐慌は、従來型の一時的金融的刺戟や部分的の救済だけで克服さるべく餘りに激烈であつて、資本主義經濟機構をその根幹から揺り動かす様に思はれた。従來の様な所謂救済を以てしては、國民經濟はその負擔に押し潰される危険があつた。又或る超越的な理念を以ての救済は資本主義そのものの止揚をさへ要求する様に思はれた。そこで選ばれざるを得なかつた方法は、(1)疲弊し切つた國民經濟になるべく負擔をかけないこと。(2)産業豫備軍を従來の様に不經濟に遊休させないこと。(3)過剰資本を非生産的に休眠させないこと。(4)過剰諸財を生産的に利用すること、等々であつた。従來型の救済は「豫備」といふ名に於て勞働力や資本を無意味に長期に待期遊休させ、以て國民經濟的不經濟を敢てする場合が多かつた。生産財及び消費財についても同様である。殊に後者の處分方法に至つては、人をして社會的公憤を禁ぜざらしむるものが多かつた。そこでどうしても爲さなければならぬことは、休眠勞働力及び休眠資本を生産的に覺醒せしむることによつて、これらの勞働力及び資本、並びに過剰諸財を漸次生産機構の内部に吸収し、以て擴大再生産の進行を準備することであつた。そしてそれを統制の統制といふ形で國家がリードしなければならなかつたのであるが、その必要と可能とが、已に述べた様な經濟的基礎の上に準備されてゐたのである。そしてそこに、同じ恐慌克服策であり乍ら従來のそれと

は全く異なる統制經濟の特質が生み出されて來たのである。思ふに生産政策としての社會政策といふ考へ方が時代的色調をおびて強く浮き上つて來たのも、こうした所にその由因があるのではあるまいか。併しここに注意しなければならぬことは、國家は過剰諸財の整理のために、一方に於てはどうしても該過剰諸財の生産を或る程度迄制限しなければならなかつたといふことである。統制經濟にとかく制限的原則 (Limiting principle) が支配しがちなのは、これがためであらう。統制經濟は一方に休眠勞働力及び資本を生産的に覺醒せしむることによつての生産力擴充といふ要請をもちながら、他方に主として價格吊上げのための生産制限といふ要請をも持たざるを得ないのである。

次に然らば、國家は如何にして休眠勞働力及び資本を生産的に覺醒させたか。財政的にいへば赤字公債の發行による救済事業の遂行である。低金利政策では最早企業活動は刺戟されえなかつたし、安全を安全をと求めて容易に投資しなかつた資本所有者達にとつては、政府こそ最も安全な唯一の借手であつた。國家は、公債といふ手段で借り集めた休眠資本を、先づ第一に大規模な土木事業の遂行によつて生産的に覺醒せしめた。そしてそうすることによつて、休眠勞働力にも活をいれることが出來たし、又過剰諸財をも生産的に利用することが出來たのである。蓋し土木事業は、一面、生産力擴充の基底として必要欠くべからざるものであると同時に國防行動の準備にもなり得、他面、勞力資材を無限に要求しながらも尙ほ且つ生産過剰を來す恐れがなかつた。そしてその上に、私的企業と競争してその發展を壓

迫する様な危険もなかつた。こういふ極度に恵まれた諸條件が土木事業に救世的役割を荷負はしめたのであり、又各國統制經濟が殆ど凡べて大規模な土木事業からはじまつたのも、蓋しこれがためと思はれる。土木事業と同様の性質を有するものに軍需産業がある。統制經濟に國防的色彩が賦與せられるのは、資本主義の好戰的性質とか支配經濟圏の確立とか等々といつた問題の外に、尙ほこうした方面からの要求が加へられてゐるのであらう。

統制經濟は斯様に土木事業の遂行と軍需産業の擴充とによつて過剩諸財の價格引上げと國民購買力の造出とを行ひ、以て先づ、經濟の均衡回復に「最初の刺戟」を與へ、ついでその擴張・その累積的統制として國家自身の經濟機構内への積極的介入による重要産業の諸統制へと進んで來たのである。そしてこれらの國家活動が凡て資本所有者から借り集めた休眠資本乃至國家自身の生産にかかる貨幣によつて行はれたことは言ふ迄もない。従て統制經濟に於ける景氣回復は計畫の結果であるよりも貨幣の結果である傾きが強い。ことに國家自身による貨幣の生産は私的企業家を刺戟こそすれ決して之を抑壓する様な危険はない。そして又資本主義經濟に於て全經濟過程を支配しうるものは貨幣・信用制度だけであるからである。^(一)統制經濟がインフレ的性格を生得してゐるのは蓋しこうした理由に基くものであらう。通貨の管理の行はれざるを得ない所以も、ここに胚胎してゐるのではあるまいか。そして又、過去のデフレーション政策が凡て對外經濟關係の顧慮を主眼としたことを思へば、アウトアルキーを企圖するプロツ

ク・統制經濟にはデフレーションを強行しなければならない契機がない様に思はれる。従つて統制經濟の本來的に内包する重大問題の一つは、一方に於て大規模なインフレーションを行ひながら、他方に於てこの爆發を極度に警戒しなければならぬといふことであらう。そしてそのためには何を措いても價格の公的束縛と生産力の擴充といふ二律背反的方向が要求されて來るのである。戦時下の今日特に強調せられる物價の公定乃至停止と生産力擴充との中には、戰爭目的完遂のための直接的必要が大部分を占めてゐるのであるが、インフレ的性格をもつ統制經濟は、經濟均衡の正常的回復のための要請としても價格の公的束縛と生産力の擴充とを行はざるを得ないのであらう。因に、統制經濟に於けるインフレーションが、物價高騰の外に特に闇相場や商品飢饉 (Warrenhunger) となつて現はれることを附言しておく。

次に各國統制經濟の特徴を一瞥しよう。^(二)統制經濟を、獨占資本主義の一定段階に於ける獨占組織を通して行はれる國家の經濟過程への直接的干渉と理解し、そしてその生長を一九二九年の世界的大恐慌以後に見た我々は、ここでもそれらとの關聯に於て各國の特徴を把握しなければならぬ。

先づ典型的なものとされるドイツの統制經濟について見よう。ドイツが戰爭に負け、社會革命の洗禮をうけ、植民地を奪はれ、賠償金を賦課され、その上史上未前のインフレーションによつて、獨逸國民經濟が徹底的に破壊しつくされたことは、何人の記憶にも新たな所である。「一九三三年二月より三月

の交米國に金融恐慌が襲來せる頃は世界的不況は正にこの頂點に達し、獨逸に於ても經濟情勢はどん底にあるの觀を呈した。これと殆ど時を同じくしてナチスは政權を獲得したのだ。從て、ヒットラーにとりては不況の打開はその最も重大なる責務であり、この危機の克服如何は正に國民社會主義實現の試金石となるのである。かくしてナチスの計畫經濟は發展して行く^(三)のであつたが、特にヒットラーに残された問題は、勞働組合の破壊と勞働者の再組織といふことであつた。歴代の政府が恐慌克服のために或は合理化或は社會化と唱へて經濟統制に死力を盡して來たのであるが、只一つ手をつけえなかつた問題は之れであつたのである。ヒットラーにとつて幸ひなことには、社會民主黨政府の經濟政策の失敗は文字通り國民を塗炭の苦しみの中に置いてゐた。國民の側には、生活の保證さへ得られるならば、如何なる犠牲にも應じようといふ準備が出来てゐた。こうした苦惱とこうした準備とが最も徹底的と目されるドイツ統制經濟の生長を可能ならしめたのであらう。そしてこの生長を最もよく育んだものが、ドイツ資本主義を特徴づけてゐた自主的統制機關例へばカルテル、トラスト、コンツェルン等々の完成であつたことを忘れてはならない。「獨逸に於ける統制經濟の成功はその物的基礎が一にかかつて右の條件に最も恵まれたるが故に外ならない。歐洲大戰並びにインフレーションを通じて極めて高度化したる獨逸、通貨安定によつて不良なる經營企業の倒壊、並びに特に一九二五年以後に於ける産業合理化運動によつて完成せられたる生産過程に於ける合理化等々は、最近に於ける經濟統制の最も有力なる地盤とし

て協力した。獨逸に於ける統制經濟の比較的優越せる理由を單に強大なる政治權力にのみ求むる者は、反面に於けるかかる歴史的に完成せられたる組織並びに技術を中心とする下部構造の役割を無視し、單なる權力の強化のみが統制の手段なるかの如き錯覺に陥らざるを得ない^(四)のである。

イタリーの統制經濟が組合主義をとる一の理由としては、獨逸組織の未熟をあげなければならぬ。そしてイタリーは戰勝國であつて戦費も少く賠償金も得て世界恐慌の打撃をドイツ程には酷烈にうけてゐなかつた。そして國民經濟は農業的色彩が強く生活水準も比較的低いために失業問題はそれほど尖鋭化しなかつた。又自然的資源に恵まれることも少なく高度工業化の程度も低く、工業原料に關しては外國依存の程度が大きいために、ドイツの様な徹底せる經濟的國家主義は實行しえなかつた。その他ドイツとは革命の趣きも違ひ歴史的・社會的諸條件も異なることを考慮しなければならぬが、經濟的な面に於ては、右の様な事情がイタリー統制經濟を特色づけてゐるのではあるまいか。

政治革命を伴はなかつたアメリカ統制經濟が歴大な規模を以て、國內市場の維持發展を目標として、而かも典型的な資本主義的方法を以て行はれたことは、凡ゆる點に恵まれたアメリカ資本主義の内的必然と、世界市場の硬塞による外對進出の不可能並に獨逸のダンピングに對する自己防衛といふ外的必然とを持つてゐたことによるのであらう。ことにアメリカ獨逸資本が戦債として又その他の貸付として巨額な資本を外國に焦げつかせてゐることも考慮せられなければならない重要な問題であらう。ルーズヴ

エルト大統領が公共の利益と私の利益とを同時に衝突なく追求しようと考へてゐるのも、アメリカ資本主義の餘裕が許す所ではあるまいか。

ロシアの計畫經濟をみよう。ロシアだけを計畫經濟と呼んで爾餘の統制經濟と本質的に區別せんとすることは已に述べた。ロシアの經濟機構が他の諸列強のそれと全く異なることは言ふ迄もない。従つてその計畫經濟が獨占資本主義に便乗してゐるものでないこと、並に干涉・統制・計畫などの技術や程度との相違がその本質を形成してゐるのでないことも明白である。詳述は別の機會に譲つて、ロシアの計畫經濟の徹底性が、他國と異なる所以だけを考へてみる。ロシアの國民經濟も、敗戦、革命、内亂、インフレーション、經濟封鎖等によつて酷烈な破壊を蒙つた。その破壊しつくされた地盤の上に社會主義的計畫經濟を新に建設したのであるが、この場合、それを恵みしたのは却つて物資の極端な不足、工業生産力の未發達といふ逆説的な事實であつた。計畫によつて何か少しでもよりよいものが得られれば、そして少しでも生活水準が高められれば、人々は一應満足出來た。農業國であつて食糧の自給自足が可能であることが之を助けた。農民は工業生産物を與へられることによる生活内容の豊富化につられて、農産物を手放した。又逆に農民及び労働者が農奴的忍耐力をもつことによつて極度に迄生活を切り下げうることが、計畫の實行を可能ならしめた。といふのは、ロシアの様な計畫經濟に於ては、國民生活をどこ迄切り下げうるかによつて、資本投資の一條件が作り出されるからである。第一次第二次五ヶ年計畫の歴

大なる資本投資はかくして可能ならしめられたのである。(五) 勿論この外に社會主義精神の高揚といふ様な事柄もたしかに與つて力あらう。併しさうした問題の理解は後にゆづつて、計畫經濟と統制經濟との相違について項を改めて關説しよう。

註(一) E. Lederer, Planwirtschaft, 1932. S. 16.

(二) G. D. H. Cole, Practical Economics, 1938. 及び風早八十二著「労働の理論と政策」第一編第四章参照

(三) 目崎憲司著「計畫經濟」五二頁

(四) 柳川昇「歐洲大戰後に於ける獨逸經濟の再建」(經濟學論集九ノ十一)

(五) 松山茂二郎著、前掲書 四七頁

四

私は統制經濟を資本主義の一段階であると規定し、計畫經濟を社會主義の上に基礎をおくものと理解した。資本主義とは何ぞや、社會主義の本質如何といふ問題は、ここに言及すべく餘りに大きな問題である。私の概念規定は他日に譲つて、ここでは普通に理解されてゐる様な意味に理解して、(或は通俗的でないといふ非難があらうかも知れぬが) 計畫經濟と統制經濟との相違を明らかにしよう。

計畫經濟は、眞にその本質に徹するためには、個人の職業選擇の自由、投資の自由、労働力移動の自

由、消費の自由、並に私的財産の所有等々を、原則的に否定しなければならぬ。そして國民所得の性質は根本的に變化し、價格形成に對する消費者の役割も極少に消極化し、市場の機能も價格の本質も資本主義のそれとは全く異なる。經濟計算の能不能、貨幣の存否等も論議せられる様に、國民經濟の機構は資本主義のそれとは本質的に異らざるを得なくなる。徹底せる計畫經濟に於ては、國民經濟は流通經濟であることをやめて經營經濟乃至行政經濟になりをはらざるを得ない様に考へられる。そしてそれが圓滑に行はれるためには、私有財産が先づ徹底的に廢止せられること、次に國民が中央當局の計畫に如何なる犠牲を拂つても適應して行くこと、否犠牲と感じなくなる程に人間性の變化すること等が要求せられる。尙ほ考へられる多くの問題があるが、右に關説した所だけでも、今日の統制經濟との間に本質的な相違が看取出来る様に思はれる。ゾンバルトもレーデラーも資本主義の上に計畫經濟の行はれることを主張するが、私は右様の理由で、統制經濟と計畫經濟とを峻別する。

次に統制經濟の資本主義的性格を二三の具體的な問題についてみてみる。例へば公定價格である。人は之を以て資本主義的價格法則の否定と高く評價する。併し私の考へを以てすれば、公定價格があるが故に資本主義經濟機構が困難ながらも運営されて行くのである。適正價格といふ言葉は、公定價格に出来るだけ多くの市場價格的性質を與へようとする。別言すれば、公定價格をして價格本來の機能を果さしめようとする努力の現はれではあるまいか。公定價格は表面非生産資本主義的性格を有するが如くに

みえても、その本質は、資本主義經濟機構の維持運営の役目を荷負はされてゐることは、已に述べた統制經濟が本然的に具有する二律背反的問題の性質から來るのであらう。又利潤の制限が過大視される。國家總動員法第十一條の發動問題を例にとつてみるに、あれ程經濟界を動搖せしめしに不拘、結果は一割配當といふ所におちつた。當時一割以上の配當を行つてゐた會社が果して幾つあつたであらう。戰時經濟の難局に當面する極く最近迄、我が國經濟には、儲けたい程儲けるといふプリンシプルが公然と行はれてゐたのではあるまいか。そしてそこに戰時經濟の運営に關して重大な問題が残されてゐたのではあるまいか。最近陸軍の發表せる利潤統制は、正に正當なる戰時經濟的手段と理解すべきであらう。戰爭は資本主義を押しやる。併しそれは國民生活を押し勞働運動を押しやる様子を以てするものである。親も子も國家の存立と發展のために生命をも捨てつつあるこの未曾有の難局に、利潤の制限、暴利の取締、闇相場の嚴禁並にストライキの徹底的防止等々の行はれるのは餘りにも當然至極であつて、之を以て直に資本主義の全面的否定と考へるのは、少し速断にすぎるのではあるまいか。

ここで私は戰時經濟に言及しよう。統制經濟を國防經濟とも言つて、統制經濟と戰時經濟とを同一視する人もある。事實今日の我國は本來の意味の統制經濟といふよりも戰時經濟といふべきであらう。戰時統制經濟といふ言葉などは、戰爭のために國家が干涉・統制する經濟といふ意味であらうか。然りとすれば戰時經濟と同じであつて、少くとも發生當時に於ける本來の統制經濟の概念とは非常にへだた

る。發生當時の概念などに囚はれるのが悪いかもしれぬ。併し戦時経済と統制経済とが同じものであるとするならば、過去の凡ての戦時経済はみんな統制経済になつて了ふ。そうだとはいふ人もあらう。併し私は前述の様な概念規定に従つて、統制経済を資本主義に於ける統制段階と解する故、どうしても統制経済と戦時経済とを厳密に區別せざるを得なくなる。又そう兩者を區別するのが正しいと思ふ。何となれば、前者は明らかに歴史的概念であるが、後者には少しもさうした香ひはない。若しも統制経済を戦時経済と同一視するならば、第一次世界大戦は勿論、ナポレオン戦争、及びそれ以前の諸戦争に於ける経済もみんな統制経済になつて了ふ。ナポレオンの大陸封鎖令を今日の統制や計畫と同視してよいであらうか。又日清・日露の兩戦役に於ける我が國の経済を一般に統制経済といふであらうか。強いて言つて言へないこともなからうが、私には納得の行かない或るものが残滓する。重ねて言ふ、戦時に於ける干渉経済を統制経済といふならば、何にも事新しく「統制経済の理論」を云々する必要はなからう。そしてその理論とビグラーの "Political Economy of War" とが本質的に異なることも考へねばならぬ。統制経済或は計畫経済といふ語が何か言ふに言はれぬ魅力を以て逼て來るのは、現在吾々が戦争しつつあるからではなくて、言葉そのものが或る歴史の意味を含蓄してゐるからではあるまいか。現に、今日の我が國経済については、統制経済といふよりは戦時経済といつた方が、なめらかにひびく様になつてゐる。さればこそ戦時統制経済、戦時計畫経済と特に戦時といふ修飾語が必要とされてゐるのであらう。

う。私は現在の戦時経済を、統制段階（或は統制資本主義段階）に於ける戦時経済と考へる。因に、日清・日露の戦時経済は、之を、自由主義経済段階に於ける戦時経済と考へる。今次の歐洲諸國の経済は統制段階における戦時経済、ロシアのそれは計畫経済下に於ける戦時経済と規定したい。武村教授は本年（昭和十五年）六月號の「公論」誌上で、景氣政策型の統制経済から國防経済型の統制経済へといふ言葉を用ひられて、現時日本の経済を、國防経済型統制経済と規定してゐる。併しそれは、戦時的色彩が極めて濃厚になつたといふことで、結局、所謂戦時統制経済に等しく、私の言ふ統制段階に於ける戦時経済ではあるまいか。戦時経済とは、戦争目的完遂のための國民経済の總動員を意味するであらうから、現時日本の経済に、文字通りの非常時型政策が強行せられるのは當然であらう。人の子が應召應徴して行く秋である。物の・機構の應徴は當然すぎる程に當然である。かかる状態に於ける利潤の制限、物價の停止、物資の強制買上、配給機構の改革並に切符制度等々は、戦争目的完遂のための應急・緊急の措置であつて之を以て直ちに再編成される將來的経済制度の全面的基石と考へてはならない。（勿論基石になるもの或はせねばならぬものも澤山あるが）。これをすぐさう考へて了ふところに大きすぎる恐怖と大きすぎる期待とがあるのではあるまいか。

然らば何故に、過去の如何なる戦争にもみられなかつた様な、大規模な且つ厳格な干渉・統制がなされるのであらう。私は之を戦争技術の發展に求めたい。そしてそのために、Stephen Ph. Possony の

To-morrow's War, its Planning, Management and Cost. 1938 を一つの参考といたしたい。現代の戦争は、その技術を百パーセントに發揮して所期の効果を収めるためには、國民經濟の生産力を以てしては不可能である。そこで徹底せる國民經濟の合理化・計畫化が行はなければならない、といふことが理解せられるであらう。こうした戦争技術をもつ限り、各々の國家が將來に於ても、いや將來は益々國防完全化の必要から國民經濟に干渉・統制を加へることは必然であらう。併し、だからと言つてすぐに戦時體制の平常化・永久化を考へてしまふことには、私には何かしら躊躇がある。

戦後の問題については言はぬがよい。併し私はここに阿部賢一先生のご意見を拜借して、僭越だが私も亦そんな風に考へるといふことだけを示しておく。「今日の事變は、日本の資本主義の發展にとつて未だ嘗て經驗しなかつた様な促進を見せるであらうと私は思ふ。……統制經濟々々々といふと、何んだか變つた様に思ふ。國內に於ても、或は滿洲國に於て或は北支に於て、中支に於て、まる切り違つた經濟統制が立てられてゐる様に考へられるが、さうではないと思ふ。批判は別として、事實として日本は矢張り曾て英國が戦争毎に發展した道を、ドイツが踏んで來た道を、アメリカが踏んで來た道を、矢張り日本も進みつつあるのではないか。さういふ線に沿うて進んで居ると私は見て居ります。然しそれにせよ結局今日の問題に即して云へば成るがままに委して置くといふ事は、非常に危いことで躓きます。冗が多い。さういふ冗とか犠牲なしに、外の言葉で云へば、吾々の生活が、國民大衆の生活が、少

しでも犠牲なく營まれて行くためには、經濟機構を其處へ持つて行く必要があると思ふ」。(經濟學論集 九ノ六)

「經濟機構を其處へ持つて行く」といふことの中には、いろいろの意味が含蓄せられるであらう。私がかう思ふ。戦後に於ても統制經濟であることに變りはないが、併し戦前型のそれと戦後型のそれとの間に非常な隔りがあらう。先づ第一に戦後の日本經濟は、阿部先生が卒直明快に論斷せられる様に、大成功裡に事變處理が行はれた曉には、非常な發展と膨脹をなしてゐると同時に、非常に複雑化してゐるであらう。殊に東亞經濟圏の確立に必然隨伴する複雑化は、戦前のそれと全く違つた統制技術を必要とするであらう。第二に、失はれた均衡の回復といふ統制經濟發生當時の要請は、戦争を通して、一應發展的に解消せしめられてゐるであらう。従てさういふ意味の統制は姿を消して、統制經濟が本然的にもつ問題解決の要請としてのプロツク結成が大きく日程に上るであらう。第三には、戦時に於ける應急・緊急の諸統制の中には、戦前型の統制經濟が企てて果しえなかつた諸懸案を一舉に解決したものもあれば、又已むをえぬ必要から起つた行きすぎもあるであらう。特に戦争行動と直接關係を有する行きすぎは緩和或は撤廢せられて、戦前型のそれによつて企てられたコースを邁進した諸統制は戦時中に發見された新たなコースと共に戦後に發展的に進んで行かう。特に多數の國策會社の創立及び配給機構の改革等によつて、社會的總資本に對する國家及び公共資本の比重は一層に増加し、經濟機構内に於ける國家の

活動は益と壓力的になつてくるために、國民經濟の構造的變化は一層に促進せられて來る。従つてさうした方面から來る國家管理は戰後に於ては一層に強化せられざるを得ないであらう。ことに財政政策にみる様に、國家が一度手をつけた事柄は容易にやめられえない。投下された資本の引上げられ難いのは言ふ迄もない。そして一統制は直ちに他の統制を生まざるを得ないのが資本主義經濟機構の必然である。してみれば、戰後の經濟に於て益々統制が正常化するであらうことは必然であらう。そして又ここに特に注意されなければならないのは、國家の經濟活動が私的企業家のそれと本質的に異つて公益を第一義とすることである。利潤の無制限追求ではなしに、公益を本位とする國家活動が國民經濟の凡ゆる部分に壓力的に作用するとすれば、そういふ所から倫理的な色彩が戰後型の統制經濟の一特徴をなすかもしれない。第四に與へられた國際情勢の下に於ける・又加速度的に發展する戰爭技術の下に於ける・國防の完壁化のために、諸種の計畫が大規模に國家によつて企てられるであらう。さうした計畫が益々國家の經濟的活動を盛んならしめ、以て國民經濟に於ける國家の役割を大ならしめる。國家は益々經濟的な自覺と經濟的な論理とをもつてくる。國家の作用が國民經濟のあらゆる部分に行き亘らざるを得なくなるであらう。

その時統制經濟は、資本主義的な殻から脱して、非資本主義的なものに發展して行くのであらうか。山本勝市氏は「統制經濟は云はば社會主義を父とし資本主義を母とせる合の子である」といはれるが、

私にはやはり、自由主義も獨占主義も資本主義であつた様に、統制主義も資本主義である様に思はれる。そして高度に國家本位に合理化された資本主義的流通經濟である様に思はれる。

(早稻田政治經濟學雜誌第七十二號所掲)

國民經濟に於ける意志の問題

一

私は嘗つてかう書いた。「國家が、その有する理想或は必要から、國民經濟に如何なる干渉・統制を加へても、是認されなければならぬ理由があるであらう。そして今日の統制經濟の中にそうした要素が多く盛られてゐるであらうことも、そしてそこに經濟倫理が強調せられねばならぬことも勿論私は承認する。併し本稿では、統制經濟に於ける國家の活動を、經濟外的な何らかの超越的理念を根據としての上からの・或は外からの・經濟機構への干渉と理解せずして、經濟機構との内的關聯に於て之を把握したいと努めてゐるのである。私は巨大なる現實への接近の一の謙虚な仕方として、經濟といふ面から一應眺めてみようとするのである」と。

そして私は今またこの稿に於ても、國民經濟に於ける意志の問題を、一應、經濟といふ面から謙虚に眺めてみようとするのである。經濟といふ面から眺めるといふことがまづ第一に問題にはならう。併し私はここではアモン教授に従つて次の様にだけ述べておく。といふのは、科學論は本稿の目的でもなく

又その範圍の内にもないからである。「科學的考察の對象となるところのものは、全く現實に體驗される儘の經驗ではなく、吾々の悟性作用の一抽象構造物であつて、この悟性作用は一方に於て、同一の經驗對象の他の一切の屬性を全く無視しつつ、同時に他方に於て、或る特定の一屬性を遊離化して科學的吟味を行ふところのものである。」例へば、認識對象としての鐵は、經驗對象としての鐵が吾々の悟性作用によつて、その或る特定の一屬性のみ孤立化せしめられたところの、從て極めて一面的ではあるが併しそれ故、こそ或る意味に於て把握せられたところの概念であつて、それは、その意味の性質に從て、或は物理學、或は化學、或は礦物學、或はまた經濟學の對象となるところのものである。蓋し「科學はその設定せる認識課題を通じて、從つてその設定せる問題を通して構成せられる。それ故に、科學は諸問題の複合體であり、嚴密なる論理的意味に於ける科學は、論理的に關聯してゐる諸問題の一體系である」^(三)からであり、「科學の研究領域の根柢に存するものは、事物の現實的關聯 (die sachlichen Zusammenhänge der Dinge) ではなくして、問題の思维的關聯 (die gedanklichen Zusammenhänge der Probleme) ^(四)からである。」

右の様な考へ方に對して多くの批判の存することは私自身もよく承知してゐる。併しその當否を暫らく問はず、私はただ右の様な考へ方に從て行けるところまで行つてみる。詰つたら潔よく引きかへして再出發いたします。

統制経済とくに戦時経済の進展につれて、かつて「見えざる手」の導きに調和を期待した無意志の國民經濟に代つて、その隅々にまで國家の意志が強力に作用する國民經濟が現はれて來た。これが新體制の經濟であることには間違ひないが、その理解の仕方に至つては人様々である。とくにその意志の解釋は、學者をして、或は「意志經濟^(五)」を、或は「經濟社會學^(六)」を、或はまた「國家科學としての經濟學^(七)」、「國家經濟學」を主張せしめてゐる。これらの學者に共通な事柄は、經濟を政治から引きはなすことなしに、文字通りの「政治經濟學」、即ち國家行爲の論理たるべき經濟學を打ち建てようとするに在る。私は勿論かやうな努力に對して多大の尊敬を惜しまない。現に私自身が、「經濟學と經濟國家學」といふ問題に思ひを潜めてゐるからである。

併し私に於ては、科學としての經濟學は、あくまで客體の論理即ち合理的論理をのみ問題としてサインの領域に踏踏すべく、決して主體の論理即ち直觀的論理を以てゾルレンの世界に飛翔してはならないやうに考へられる。従つて國家の意志を經濟學の對象として眺めるときにも、かくありたい、かくあらねばならぬといふ意欲や理想の形でこれを把へずして、サインの面に引きおろしてかくあるものとして把へたいと思ふのである。

その把へられたものが極めて一面的なものであることは、先に引用したアモン教授の言葉によつて明瞭である。併し、科學としての經濟學は、かやうな把へ方をするより外に仕方がない。「軍事活動とい

へども市場經濟を通過するかぎりにおいては經濟の領域に入つて來る^(八)」やうに、凡ての行爲が、ある面から、ある意味において、把へられる限りにおいて、さういふものとして、それぞれの科學の對象となるのである。經濟學は、軍事活動を、それが市場を通過するときのみ經濟行爲として把握すれば足りるのである。またそれより外に經濟學としては觀察の仕方はないのである。もちろん葦のすいから天井をのぞくことにならう。併しそれでいいのである。科學といふものは本來さういふ性質のものである。併しのぞかれた部分が天井であることには間違ひない。そこに、科學が行爲的現實の契機たりうる性質が生れる。あくまで契機に止つて行爲それ自身に現實化することは出来ないが。併し、それ故にこそ、却つて科學的眞實が主張されうるのである。法律學に對してさういふ科學性を許す人が、經濟學に對してさういふ許容を與へないのは何故であらう。思ふに、經濟といふことが、我々の生活において、他のいづれよりも、より直接より深刻より緊急であるためであらうか。凡てを割り切りえない經濟學は經濟學に非ずといふ非難と期待は、經濟學はとつては絶大な名譽であると共にまた堪え難い負擔である。かやうな期待に報いんとする熱情から、或はまたかやうな期待に對する慣れすぎから、經濟學の一面的把握を全面的にまで押し擴げて凡てを割り切らうとする誤謬が生ずる。經濟至上主義とはかかる性質のもではなからうか。私達はかかる行き過ぎ、極度に注意深くあらねばならぬ。私達はただ全面的把握に對する一つの、本質的なデータを提供すべく渾身の努力を傾ければよいのである。經濟學は部分的判斷

に基く論理であり、私のいふ「經濟國家學」は、全部的判斷に基く國家行爲の論理^(九)である。前者は後者に對して一つの忠告を與へようとするのであり、與へうれば足りるのである。經濟學は斯様に謙虚であり、經濟學者は斯様に謹み深いものであらねばならぬ。

註(一) 拙稿「統制經濟に關する一考察」(早稻田政治經濟學雜誌第七十二號)。尙、本書二〇六頁參照。

(II) Alfred Amonn, Objekt und Grundbegriffe der theoretischen Nationalökonomie, Zweite Auflage, 1927. Ss. 23-24. 山口忠夫教授譯「理論經濟學の對象と基礎概念」三九頁參照。

(III) Amonn, op. cit., S. 15. 同譯 二五頁參照。

(IV) Amonn op. cit., S. 15. Max Weber, Die Objektivität sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis, (Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 1922.) S. 166. 富永、立野兩教授共譯「社會科學方法論」岩波文庫三八頁。

(五) 作田莊一博士「自然經濟と意志經濟」。

(六) 高島善哉教授「經濟社會學の根本問題」。

(七) 谷口吉彦博士「國家科學としての經濟學」經濟論叢五十二ノ一所掲論文。

(八) 大熊信行博士「政治經濟學の問題」二三頁。

(九) 田邊元博士「哲學の方向」參照。

II

さて然らば、國民經濟に於ける國家の意志を、如何に經濟學的に把握するか、私の考へを述べてみる。思ふに經濟の政治化とは、經濟的行爲者としての國家が國民經濟の凡ゆる部分に壓力的に作用することの謂であり、そして國民經濟内に於ける國家の役割をかやうに壓力的たらしめたのは、それは、現代國家の財政が主として軍備費及び社會費を中心として、莫大に膨脹してゐること、從て購買力保持者として又國民所得の構成者として絶大なる力を有すること、及び公的企業の活動領域が極めて廣きに亘てゐること、從つて國家並に公共資本の社會的總資本に對する比重の著増してゐること等に基いて現代國家がもつた經濟的自覺と經濟的論理であらう。そして今日の戰時經濟を通じてこの自覺と論理に基く壓力は、ますます絶對的性質を帯びて來、國民經濟の構造的變化をいよいよ急激に促進する。そしてその構造的變化が、國民經濟の全面に亘る革新的合理化であり、徹底的計畫化であることは言ふまでもない。この計畫化の主體が、過去の産業合理化時代・自主的統制時代のそれと全く異つて、國家であるところに今日の意味があるのであるが、國家なるが故に、その意志の把握に色々の立場が生れるのである。またそこに國民經濟に於ける意志の問題が成立するのである。

私が上に述べたやうな考へから、計畫化の主體たる國家の意志を、經濟行爲者としての國家の意志と

して把握するとは言ふまでもない。市場經濟の指導者または經濟過程の管理者として、國家がいよいよ乗り出すためには、そしてその出動が積極的であればある程、國家の行動は少くとも經濟自身のもつ論理の線に沿ふものでなければ長期に亘つて効果的であることは至難であらう、といふのが私の考へであるからである。

然らば、そのやうな國家の意志は、國民經濟内において如何やうに表現され實現されるであらうか。思ふに、國家の意志が經濟面に現はれる場合は、常に財政を通してであらう。蓋し、財政は國家の政治行爲であると同時に經濟行爲であつて、政治は財政を通ることによつて經濟に通ずるのであり、財政において國家意志の全面的表現たる政治と國民經濟の總過程とが密接不可分に結びつけられるからである。例へば、租税は購買力の移轉であり、公債は國家信用の創造である。^(二)國防費であらうと教育費であらうと、國家の支出政策は常に市場における購買力に具體化して、財貨及び勞務の配置を變更し、以て生産力の構造と國民所得の構成とを變化せしめる。特に、戰時財政におけるその効果は絶大である。國民經濟の構造的變化は、かやうに、國家の理想、従つて政治が財政を通して經濟行爲に具體化されることによつて、齎らされるのであつて、國家理想の單なる教示によつて齎らされるものでは決してない。

經濟行爲に具體化されたる國家の理想が、國民經濟における意志として、如何に我が國民經濟を現實に再編成しつつかあるかの説述は暫らく後に譲つて、谷口吉彦博士の御意見をここに拜借して——博士に

はまことに御迷惑で恐縮だが——前述のやうな私の考へを再び整理してみる。

「國家購買力を國民購買力から區別して把握せんとする根據は、恰かも國家經濟を國民經濟から區別する場合と同じく根本的には國家觀の相違に出發する。近世的または西洋的の國家觀すなはち個人主義または民主主義の國家觀に立つ以上は、國家は個人の集合體以外の何ものでもないから、個人の集合より成る全體としての國民の外には國家を認めないか、または國民と國家を同視するか、或は少くとも國民に比して國家を重視しない。從來の經濟學は、根本的には意識的にしろ無意識的にしろ、かくの如き國家觀を前提としてゐるから、精々のところ個別經濟の綜合としての國民經濟を考へるに過ぎず、それさへ物質經濟學または個人經濟學の立場においては十分に考へられてゐない。」……「然るに現代的または日本的の國家觀においては、國家は決して個々の國民の集合體に止るものではない。すべての個人を包攝しながらも、國家は個人以上の存在である。また全體としての國民以上に、これを超越する高次的存在として國家を認める。かくの如く綜合的全體主義の國家觀においては、個別經濟の綜合としての國民經濟以上に、これと區別せらるる國家經濟の存在を認め、従つてまた國民購買力以上にこれと區別せらるる國家購買力を認めざるを得ない。」^(三)

谷口博士が主張されようとするポイントは今日の誰にでもよく納得出来るところである。ことに博士が提唱せらるる「國家經濟學」の立場からは尙更のことである。私に何の異存のあらう筈もない。ただ

併し私に疑問として残るところを敢て述べさせていただくならば、國家經濟學、個人經濟學、或は物質經濟學等々といろいろの形容詞の附せられた經濟學が語られて、そこにそれぞれの特徴が暗示せられてゐるが、それらの各々に共通なる經濟學とは果して如何なるものであらう。そんなものはないのか、それともあるのか、あるとしたらば如何なる性格のものであらう。私には *economics without adjective* がより一層に問題のやうに思はれる。

「從來の經濟學は自由主義あるひは個人主義の國家觀を前提してゐるから」云々とは、谷口博士のみならず多くの人々が常に口癖のやうに語る言葉であるが、從來の經濟學とは果して何を指すのであらう。*economics without adjective* をいふのか、それとも *with adjective of political economy* をいふのであらうか。

それからまた、科學としての經濟學は、何らかの世界觀に依據することなしには、成り立ち得ないのであらうか。私はここで失禮ながら谷口博士から一寸離れて大熊信行博士に行つてみる。大熊博士は安井琢磨助教授をして昭和十五年度に於ける我が國經濟學界の最大收穫の一つとして賞讃措かしめなかつた名著「政治經濟學の問題」に於て、「經濟學者は欲望概念や利用概念から一切の倫理性を抜きとつたものと信じてをり、したがつて『極大満足』といふときの『満足』の性質をもまた量的なるものと解し、倫理性はないと考へてゐるのであるが、しかし問題はもつとその以前にある。資力の配分が他の意

志によらず、配分者によつて『自由』に、むしろ恣意的に、行はれるときに、すなはち『消費選擇の自由』のもとにおいてこそ、最大の結果を彼自身に齎らすといふ觀念は、實は個人をもつて至高の存在と前提してゐるのみならず、個人の自由をもつて至高の社會原理とするものであり、(六六頁)、それは明らかに自由主義の世界觀によつて支へられたものであり、「外觀において無色透明化したと見える合理性の基礎法則が、依然として自由主義的限定から放たれたものではなく、同時に今日までの經濟學にいふところの經濟的合理性ないし經濟性の本質といふやうなものも、實は自由主義的な限定内の規定である」(六七頁) と強い反省を促してゐる。果してさうであらうか。科學のもつ限定は、世界觀のもつ限定であるのか、それともそれ自身の設定した問題のもつ限定であらうか。

もしも前者であつて、博士の言はれる如くであれば、不幸にして、博士御自身の生命であり、これこそ日本經濟學界の最大收穫の一つであるといはねければなるまい配分原理も、また、自由主義的ないし個人主義的限界を越へることは不可能であり、博士御自身が言はれる如くその「配分原理の擴充」である「政治經濟學の問題」も必然その限定内に止まるものといはねばならず、それを以て從來の經濟學を云々せられることは、悲しい哉、自己矛盾ではあるまいかと反省せざるを得ないのである。博士は御自身の配分原理をさやうに囚はれたものでないと主張せられ、眞の計畫經濟は國家自身による配分原理の實踐でなければならぬと主張せられるであらうが、そうだとすれば、それだけは自由主義的な限定

を越へた合理性をもつものなのであらうか。それは経済的合理性とは異なるものであらうかしら。それからまた私は、科學としての経済學は決して自由主義とか理想主義とかいふ romantic appeal^(五)をもつてゐるものではなからうといふこと、及び、自由と自由主義との間には幾分の距離のあらうことを、附言しておく。

やや横道にそれすぎたが再び谷口博士にもどつて、前述の引用にすぐ續く、博士の國家購買力に關する説明を書きつなぐ。

「併しながら國民經濟の外に國家經濟を認め、國民購買力の外に國家購買力を認めんとする立場は現實には寧ろかくの如き（前引用の如き―筆者）抽象的理論または形而上學的思索の結果生れたのではない。何よりも今日の現實が之を必然ならしめるのである。蓋し今日の現實の經濟を動かしてゐる力は、個々の國民以上の國家の力ではないか、なるほど自由經濟の時代においては、個人の個別經濟の社會的または國民的に綜合されたる國民經濟は、それ自身としては無主體であり無意思であつて、……經濟の動きはそれ自身の法則性に従つて、自動的・自律的に動いてゆくことは當然である。」然るに今日の如き統制經濟または計畫經濟の時代に進んでは、經濟の自律性は次第に狭められて、國家意思によつて動かされる範圍が次第に擴大して來る。^(六)

ここで博士が語られそれについて例證されるところは、全體主義的國家觀といふやうな形而上學的思索を用ひずとも、現實の經濟が國民以上の國家の力によつて動かされてゐる事實を忠實にさへ眺めるならば、國民經濟の意志性は明々白々であらう、といふことである。例へば、價格も自動的な市場價格に代つて意志的な公定價格が現はれて來た。國家社會の必要とする重要商品の數量も、價格機構の自動的作用に放任せられずして、國家の意志によつて計畫的に決定され意志的に變更されつつある。従つて國民購買力も、その總量に於て、その内容に於て、國家意志によつて決定され變更される部分が次第に擴大されて來る。ことに「戰時經濟または國防經濟の時代に於ては、ただに國家意思が國民經濟を動かすに止まらず、國家そのものが重要な一經濟人となつて、強力な經濟活動をなすことになる。^(七)」のであると博士は言ふ。

そこで、私が本稿で目論むところのものは、ここに於ける博士と同じやうに、もし世界觀なしに國民經濟の意志性が考へられるものならば考へてみたい、といふことである。前來述べ來つたところで明かであるやうに、私は勿論世界觀に基く解釋（例へば教授のいはゆる國家經濟學）を否定するものではないが、經濟學といふ恐らく無世界觀でありえよう科學の對象として、無世界觀のままに、國民經濟に於ける意志の問題を考へられるところまで考へてみようとするのである。もし博士が言はれるやうに、國家を極めて強力なる經濟活動をなす一經濟人として把握し、その強力なる經濟活動が、個々の國民の經濟活動以上の力となつて、今日の現實の經濟を動かしてゐるものと理解することによつて、統制經濟の

本質に接近しようとするならば、従来の經濟學 (economics without adjective) を何にもさう弊履の如くに捨て去る必要もなければ、また各人各様の煩瑣經濟學をさう急に打ち建てる必要もなからう。私は、「赤き理想ゾルレンの炎を以て冷たかるべき現實ザインの青き色を焼きつくさんとする」經濟學からはしばらく放たれてゐたいのである。科學としての經濟學は冷たいザインにへばりつく *Thud* であつていいのではなからうか。科學といふものはそもそもそういふシミツタレではあるまいか。併し、私も理想はもつ、國家も理想は實現して行かねばならぬ。國家の全人格的判断にもとづく國家行爲の論理は、これを、谷口博士のいはゆる「國家經濟學」、私のいはんとする「經濟國家學」に於て體系づけて行つてみたい。そこにおいては私もまた、美しく豊かな *romantic appeal* をもつてゾルレンの世界に飛翔する。

併し、もし國家を強力なる一經濟人として把握しその購買力を市場に於ける支配的なるものと理解することによつて説明がつくとするならば、國家購買力を國民購買力と本質的に異なるものと規定する必要がどこにあらう。私は、國家購買力を獨占的性質を有するものとして理解することによつて、個々の國民購買力以上の經濟的勢力を有するものと考へたい。また、國家購買力なる概念は、「國家經濟學」の對象となる時と「經濟學」の對象となる時とに於ては、その内包を異にするものでなければならぬと考へる。前者の場合に於ては赤き炎として政治的優位性が強調されねばなるまいが、後者の場合に於ては

飽くまで經濟的面に醜映された蒼く冷たい影像でなければならぬ。若しそれが兩者に於て同一の概念内容をもつとするならば、同一の對象に對して二の學問が成立つといふ矛盾が生ずるからである。

然るに、谷口博士は先きの引用にすぐつづいて次のやうに語られる。從來の個人主義・自由主義の時代に於ては、國家の經濟活動も一私人と同じ資格に於て市場組織に参加し、國民經濟を構成する一要素に過ぎなかつたが、「今日においては、國家そのものの經濟活動は、質的にも量的にも、もはや一私人と同視さるべきではない。第一に、今日の國家觀においては、國家は個人を超越する高次的存在である。従つて國家の行ふ經濟活動は個人の經濟活動と同次的に併立して之と競争的地位にたつべきものではなく、その上位に存在して之に優先すべきものである。公益は私益に優先するといふ言葉は、ここでは國家の必要は個人の必要に優先せねばならぬことを意味する。即ち國家の經濟活動は個人の經濟活動とは、その性質を異にする……このことは購買力についてもまた同様であつて、個人の購買力またはその総合としての國民購買力と、國家そのものの購買力とは、全くその性質を異にし、國家購買力は國民購買力に對する優先權を有つてゐる。」第二に、國家そのものの經濟活動は、量的にもまた重要な變化を見ることとなつた。國家は最大の消費者であるといふ古い言葉は、國家を私人と同列において、個々の私人に比すれば、國家の消費は最大であるといふ意味にすぎなかつた。然るに今日の戰時經濟または國防經濟においては、個々の私人の総合としての國民經濟に對して、國家經濟の有する重要性は著し

く増大して来た。これは購買力についても同様であつて、かりに購買力を廣義に解して、商品に對する購買力の外に、勞務に對する購買力をも之に包含せしむるならば、昭和十六年度の國家購買力は、その豫算總額約百三十億圓に達すると考へねばならぬ。これは國民總所得から國民貯蓄目標百三十五億圓を控除した國民購買力に對比して、如何に重要な量的地位を占めるかを示してゐるものと言へる」と。

重ねて言ふ。私は、國民購買力に對比して極めて重要な量的地位を占めてゐるこの國家購買力を、經濟といふ面から、國民經濟構造の極めて重要な一構成要素として眺めるのである。その限りに於ては國家購買力も國民經濟内に於ける一所與である。國家といふ國民に優越するものの政治性を帯びた購買力であるからではなしに、その大きさが國民經濟の構造を支配するやうな壓力をもつてゐるといふ理由で、國家購買力を高く評價するのである。國家購買力の大きさは、已に量から質への轉化を齎らしたといふ論者もあらう。たしかにさうであらう。併し私は、國家購買力が量から質へ轉化したからといつて、それによつて、經濟學が止揚されて國家經濟學が生成するとは考へない。むしろ國家購買力のかかる轉化の意味は、國家の經濟的地位が經濟過程への單なる參加的地位から該過程の重要な支配的地位に高められることによつて、國民經濟に構造的變化が齎らされたといふところにあるのではあるまいか。別言すれば、かかる轉化の過程が、統制經濟或は計畫性ある國民經濟の生成過程であつたのではあるまいか。

國家の經濟活動が一人のそれと同視さるべきでなく、また個人のそれと同次的・競争的地位に立つべきでないのは、それは、經濟學的には、今日の國家觀において國家が個人を超越する高次的存在であるからではなく、國家の購買力が市場に於いて大なる獨占的勢力を持つてゐるからである。即ち經濟人としての國家は、昔は、經濟人としての私人と競争的立場に立つてゐたのであるが、今日に於ては、私人が之と競争すべく餘りに國家は偉大なる購買力者に成長してしまつたからである。

またもし讀者の中に「一經濟人」とか、「一私人と同じ資格に於て」とか、「一私人と同視」云々とかいふ言葉に捉はれる人があるならば、それは常識に禍ひされて、經濟學的概念に洗鍊せられてゐないためであらう。

次に戰時經濟の現實について一言しよう。戰爭が國家なり民族なりの生の鬭争であるならば、我々は如何なることがあつても生き抜かなければならないし、また勝ち抜かなければならないのである。何んのためにと手段視さるべく餘りに、生きること勝つことはそれ自身に於いて神聖であり絶對であらう。だとすれば、戰時經濟の今日に「文字通りの非常時型政策が強行せられるのは當然であらう。人の子が應召應徴して行く秋である。物の・機構の應徴は當然すぎる程當然である。」^(九) 至上命令的な戰時經濟政策の中に、經濟法則的説明の困難なるものがあつたとしても、それを以て直ちに經濟法則の存在を否定したり、經濟政策の非論理性を強調したりすることは、餘りに性急にすぎるであらう。我々は、法則なる

ものの性質を反省せねばならぬと同時に最大限度迄の矯角を快よく承認してただ牛を殺すに至らざらんことをだけ謙虚に求めなければならぬのである。

以上長過ぎる程に谷口博士の御意見を引用し、それについて冗漫に過ぎる私的な解釋を加へたが、これは、最初に書いたやうに、私が私の考を整理したいために敢て我が田に水を引いたものである。博士御自身の意圖と解釋とは私もまた同情出来る道徳的感情をもつてゐる。博士に對しては改めて非禮を深詫して御寛恕を乞ふ次第である。なほ、大熊博士に對しても、かつて先生の講筵に列した私としては餘りにも失禮であることを衷心お詫びしなければならぬのである。

註(一) 拙前掲論文(本書後篇に収録)参照。

(11) Pigou, A. A Study in Public Finance, 1928. 及び Robinson, M. E., Public Finance, 1928. 参照。

(三) 谷口吉彦博士「國家購買力と國民購買力」經濟論叢五十二ノ五、一六頁。

(四) 私はここで「限界效用均等の法則」について附言する。大熊博士に従へば之れがとかく自由主義的でない個人主義的限定内のものであるやうに思はれる。それは、我々が「満足」といふ言葉のもつ東洋的のびきに餘りにとらはれるからではなからうか。アダム・スミスにおける self-interest を自利心、利己心と譯するために—またそう譯さねばなるまいが—東洋的な「利」といふびきに捉へられて「徳性」(virtue)の一つと理解することが困難になり、行きすぎた解釋まで生ずるのではなからうか。スミスにおいては「自己に對する關心」といふやうな廣い意味が含まれてゐるのではあるまいか。と同じやうに

「限界效用均等の法則」にもとづく「極大満足」も、決してエゴイステイクな何物かを含んでゐるのではなくて種々なる生活上の必要に對して限りある生活資力を振り向けるに當つては、緩急よろしきを得なければならぬ、最もよろしきを得たときに最大の安心あるひは「完全安堵」が得られるといふことを示すにすぎない。母親が極度の節約をして収入の最大部分を遊學の子に送るときにも、彼女に於ては限界效用均等の法則に従ふ所得の按分があり、送られた子供が歸省の費用を母に心配かけないやうにと出来るだけの節約をする場合にも、彼に於ては該法則にもとづく極大満足が得られてゐるのである。これは「人間行爲における普遍的な理性原理」であつて、決して自由主義・個人主義の限定内にあるものではない。(「政治經濟學の問題」一〇—一頁参照)

かやうな人間の判斷は、前經濟學的判斷とも稱すべきものであるが、ここを通つて、我々の人間の判斷が經濟的行爲に具體化されるのである。それは丁度、國家の理想あるひは政治が、財政を通つてはじめて經濟行爲に具體化されるのと同じである。國家も無限の欲求を有限の手段で充すためにあれこれ完全に均衡のとれた豫算を組む。その組むまでの過程 (organizing process) は前經濟學的事實であり、組むでしまつた後の過程 (organized process) が經濟學の對象となる事實である。財政即ち限界效用均衡表こそは、政治が經濟に通ずるために、即ち欲求が經濟行爲に具體化するために、どうしても通らねばならぬ窄き門である。經濟學者は、その窄き門のこちら側だけを取りあつかへばいいのであり、またそれだけを取りあつかはねばならないのである。

- (五) Pigou, A., *An Economist's Apologia, in Economics in Practice*, 1935, p. 2.
(六) 谷口博士前掲論文 一七頁。
(七) 同上 一七一—一八頁。
(八) 同上 一八一—一九頁。
(九) 拙前掲論文、(本書二一九頁) 参照。

三

次に、經濟行爲に具體化される國家の意志が、如何に我が國民經濟の構造を修正しつつあるかを見て行かう。

思ふに、一國の有する基本的なる人的並に物的資源の總體は、戰時に於ても無論平時と同一である。併し軍需と民需とは、要求するものの性質においても、緊急の度においても、また規模の程度においても、大いに異なる。従て戰時に於てはこれらの資源が振り向けられる方向も違ひ、また關心の焦點も變つて来る。平時に於ては、一國民が正常の閑暇を楽しみながら、規則的に生産しうる財貨及び勞務の量が問題であるが、戰時に於ては、戰爭の現實過程に直接使用しうる量を如何して作り出すかが問題となる。もしこれを「現實の戰爭資力」(real war fund)^(一) と呼ぶならば、これは、次の四つの源泉から引

き出しうる。即ち(一)生産の増加、(二)消費の節約、(三)新投資の制限、(四)現存資本の使ひ減らし、これである。第一は産業餘力(industrial slack)の完全利用である。その典型的な例は、失業群を職業戰線に動員することによつて齎される完全雇傭の状態である。尙ほ男女青少年の就業もあれば、隱退者の仕事への復歸もある。更に勞働の時間的延長も質的強化も考へられる。しかしこれらが單に軍需産業部門に振り向けられるのみであるならば、該部門の生産増加が得られるだけで平和産業部門の必然的衰微はない。併し第二の任意ないし強制的消費節約と第三の戰爭以外の新投資制限と、これから生ずる餘力の戰爭用途への振り向けとは、平時に於ける財貨及び勞務の流れとは本質的に異つた流れを造り出す。そこに配給機構の再編成や平和産業の衰退が準備されるのは必然である。第四の現存資本の使ひ減らしの中で、最も明瞭な形態は、或る特殊の資本財を軍用に直接利用することである。それが土地建物、設備等の固定資本であることもあれば、穀物、皮革等の流動資本であることもある。また國家及び國民の所有する外國有價證券や金を動員することもある。特に金は飛び付くやうな買手が多いからである。更にまた資本の維持に向けられる財源が戰爭用途に振り向けられて了ふこともある。ここにもまた、財貨及び勞務の流れに急激なる改修が行はれて、或ひは商品飢饉或ひは轉失業等々の問題が発生する。生産力擴充の速度が近代戰の消費速度に比例し得ない限り、どうしても第二と第四の源泉は極度に利用される傾きがある。消費の節約にも限度があらうが、これは、國民の意志によつて餘程の弾力性も

持ちえよう。併し現存資本の使ひ減らしは、意志の弾力を含まないだけに、縮少再生産を加速度的ならしめる危険がある。前者が強く要求される理由である。

さて、この四つの源泉から、國家は、その絶對にもたねばならない「現實の戦争資力」を引き出すのであるが、その際における「現實資源の動員は、國家豫算の編成の中にその全貌が示され、國家豫算の編成を通して行はれるのである。」⁽¹⁾即ち、國家は單なる命令者として臨むのではなくて、財政を通じて市場に獨占的購買者として現はれる。そしてその絶大なる購買力が、磁石の様に市場の凡ゆる部分から、財貨及び勞務を吸引し、平時に於けるそれらの流れを全く改變して了ふのである。そこに國民經濟の構造的變化が準備され、國民所得の再構成が計られる。そして戦争が長期に亘れば亘る程この傾向が加速度的に強化されて行くのは必然であらう。

斯様に考へれば、中小商工業者の轉失業問題も、人間的には誠にお氣の毒にたへないが、經濟的には必然と冷たく解せざるを得ない。政府が轉業を積極的に勧誘するのは、一つには今次の長期戦が從來の様な財の流路を涸渇せしめていつまた復舊するかもはかれないし、また來るべき戦争に備へて高度の國防國家を建設するためには、今次の經驗にかんがみて、從來の如き流路の復活は許し難いと考へるからであり、二つには、從來ならば失業者をしてそのままに産業豫備軍を編成せしめてもよかつたが、そしてゆつくりと所謂社會政策的救済を考へてもよかつたが、戦時の今日は已に述べたやうに、凡ゆる産業

餘力を極度に利用しつくさねばならない必要に迫られてゐる。従て一人の失業者と雖も國民經濟的にみて、絶大の損失であり、それだけ戦争力を減退せしめることになる。従て一瞬たりともこれを生産過程の外に放置することは出來ないからである。

配給機構の再編成あるひは整備について一言する。この問題を論ずる人々の中に、ともすると、「商人は儲けすぎる、怪しからん」といふところから出發する人がある。さうかもしれぬ。併し商人の悪は人間に通有の悪であつて、獨り賣手のみが悪で買手のみが善なのでもあるまい。かりにさうであつたとしても、斯様な倫理的判斷から出發したのでは、高度國防國家の建設に即應しうる偉大なる配給機構は整備されえない。我々は近代戦の物凄い消費體制に適應しうる様な配給體制をもたねばならぬ。已に述べた様に、戦時に於ては、資源の流れが違ひ關心の焦點が變つて來る。配給機構の再編成はこの關心の焦點の變化から出發しなければならぬのである。今次の戦争がいつまで続くか、また事變處理の建設的段階がどれほど続くかは暫らく別として、我々は、論理的には、戦争と平時とを區別して考へねばならぬ。戦時體制を平時にまで永遠化することは出來ぬ。それは、人間といふものはさういふ緊張には堪え得ないものであらうから。そこで私は考へる。平時に於いては國民の經濟的福祉を増しうる様に、戦時になつたら國家の需要を遺憾なく満しうる様に、配給機構を整備することが必要であらうと。別言すれば、スイッチ一つの切り替へで、平時においては満々たる水を民田に、戦時になつては滔々たる水

を官田に送りうる様にしておくことが必要なであらう。米について考へてみる。産業組合を米の流路として、それ以外の流路は絶対に許さないことにすればよい。平時に於ては産業組合は適當の相場で――過去の米穀統制法時代の様に――農民から米を買ふ。農民の賣りたいだけを買ふ。そして國家は米の配給所を通して適當の相場で國民に賣り與へる。そして農民にも消費者にも他の機關で米を賣買することを嚴禁し、犯した者には嚴罰を課する。そして戰時になつたら、凡ての國民に割當制を行ふやうに、農民にも飯米の割當を行つて、殘餘を殘らず公定の價格で買ひ上げる。かくすれば、そこに中間の商人は存在しないから、米が闇に迷ふやうな心配ない。國家の要求するだけが、産業組合を通して、農林省の倉庫に集積されることになる。但し、この場合の産業組合は、「俺たちのために俺たちの利益をまもる」協同組合ではなくて、國家への協同をなす協同組合でなければならぬ。平時に於ては、國家は農民の賣りたいだけを買ふのであるから、或る時には莫大な量を買ひ上げねばならぬかもしれぬ。そのためには莫大なる財政支出を餘儀なくせられる。幾何を支出するかは、國家の判斷である。そしてその判斷は、限界效用均等の法則にもとづくあれに幾らこれに幾らの財政判斷である。そこには、農民も消費者も困らぬやうに、そして生産力が立派に維持發展出来るやうにとの國家の親心がもられてゐる。かかる判斷は前經濟學的判斷であつて、經濟學の對象は、かやうな判斷の結果として生ずる有效需要そのものである。米に對する國家のこの有效需要は、市場米に對する獨占的需要である故に、市價に對する支配

力は絶対に大きい。かかる絶對的な有效需要の造出と從て生ずる買上の價格とその時機とについては、政治家並に官吏に企業家能力を要求すること夥しい。

「有效需要」及び「限界效用の均等法則」といふ言葉と關聯して、國家の「價值判斷」について述べてみる。統制經濟あるひは計畫性ある國民經濟に於ては、從來の自由主義經濟に於けると異つて、國家の價值判斷に基いて價格が決定され生産が行はれると、よく言はれる。たしかにさうだ。併しそこで問題になるのは、國家の價值判斷の性質である。國民がロボット化して了つた極限を考へることがよく行はれるが、これは誤りであらう。國民がロボット化して了れば問題はないが、さう行かぬところに、統制經濟や計畫經濟の悩みがある。悩みは人間にまた人間社會に固有なものはあるまいか。人間といふ言葉が、個を示すと同時に多を示すやうに、^(三)また人間は人の間にゐないと人間でないやうに、人間といふものは、常に個に對する關心と多に對する關心との相剋に悩むものではなからうか。(個に對する關心が自己目的となつてならない今日、特に要求せられるものは、國家哲學と戰爭哲學とである。) 國民がロボット化しがたいところに、國家の價值判斷の性質を求めねばならぬ。私はかう考へてゐる。國家が豫算を編成するときには、國防といふ大理想からあれを幾らこれを幾ら、また教育といふ見地からあれに幾らこれに幾ら、等々と考へられる限り考へ抜く。そしてそこに出來上つた財政表は、あれに對しても、これに對しても、少くとも、與へられた條件内に於いては、極大の満足が得られるやうな均り合ひ

を保つてゐる。別言すれば、限界効用が均等になるやうに、國家は、その利用しうる資力を完全に配分してゐるのである。その配分の仕方は、國家の理想と意志の然らしむるところで、已に述べたやうに、前經濟學的事實・前科學的事實 (vorwissenschaftliche Tatsache) である。この財政表に、言はば國家の價值判斷が表現されてゐるのである。その價值判斷にもとづいて、國家は、あれに幾何これに幾何を支出する。そしてその支出が、國民經濟内に於いて有效需要に具體化する。その有效需要が今日市場に於て獨占的勢力を占め、財貨勞務の流れを變更して了つてゐることは、前來繰り返へし述べたところである。この莫大緊急な國家需要に對して產業界も順應して行かねばならないために、そしてまた獨占價格的性質をもつ公定價格があるために、國家の價值判斷によつて經濟機構が動かされて行くいふ錯覺が生ずるのではあるまいか。

最後に國防を生命とする國家の意志が、企業に對して發言する經路の一端を略述して筆を擱く。肥料價格は据置かねばならぬ。併し生産の擴充は焦眉の急である。國家は業者に國庫補助を與へて損失補償をなすことに決定した。その補助金は勿論財政支出となるのであるが、それによつて、國家は業者に對して有力な發言權を獲得する。また或る大企業の經營が思はしからぬとする。該企業の經營中止は戦争がこれを許し得ぬ。國家は特殊銀行を通して國家資本を貸與すると同時にその經營に参加する。更にまた、國防は、外國保險會社への保險乃至再保險を許し得なくなつて來た。國內でこれを消化せねばなら

ぬ。民間業者が集つて再保險會社を設立した。併し國家が之を保護せぬ限り、その再保險會社の成長は至難である。國家は之に莫大な出資をして有力な發言權を獲得する。凡てこれらは、財政を通る國家資本の活動である。統制經濟あるひは戰時經濟に於ける國民經濟の構造的變化は、右の様な過程を経て或は急激に或は徐々に齎らされるのではあるまいか。

註(1) Pigou, A., *The Political Economy of War*, 1941, p. 31. 參照。

(11) Pigou, A., op. cit., p. 48.

(三) 高山岩男助教授「經濟哲學」(岩波講座倫理學第五冊)及び「哲學的人間學」參照。

(四) 和辻哲郎博士「人間の學としての倫理學」岩波全書 一二頁參照。

(早稻田政治經濟學雜誌第七十七號所掲)

アダム・スミスに於ける自利

経済學の政治化が論ぜられ、経済學の科學性が否定せられて、斯學の危機を思はしめること已に痛切なるものがある。そしてその傾向は、緊迫し行く戰時經濟の要求する統制に至上命令的性質が加はれば加はるほど、益々深刻の度が加へられて行くのである。斯様な現狀に於ては、かつて政治といふ語が不道德を意味した様に、経済といふ言葉は直ちにエゴイステイクなあるものにさへ通じようとしてゐるのである。ことに、英國經濟學が、そしてその本源であるアダム・スミスが、非倫理的なるものの權化の如くに非難や指彈の的になること甚しい。然し、果して經濟學はそういふ性格の所有者であらうか。經濟といふことがらは、俚耳になめらかなる如く、エゴイステイクなものであらうか。また經濟學は科學として獨立しえないのであらうか。科學としての經濟學はそれほどにみじめな存在でなければならぬであらうか。また所謂スミス經濟學なるものは、通俗の承認に委ねられてゐるやうに、非倫理的、非國家的なる利己的な教へに過ぎないであらうか。

「經濟といふことがらを、最も卑俗に最も端的に言ひ表はすならば「やりくり」といふことにつきるのではあるまいか。「やりくり」といふことがらは、そのことの中に、目的に對する手段の選擇と段取り (choice and arrangement) を含んでゐる。そして追求される目的が無限 (unlimited) であるに反して用ひられうる手段が有限 (limited, scarce) であるがために、その「やりくり」は極めて計畫的・極めて效果的でなければならぬ。即ち、最小の勞費を以て最大の効果を收めなければならぬ。併し極めて利己的・極めて非愛國的でなければならぬといふ要請は少しもない。なほここに附言して後日の研究に譲りたいのは、いはゆる經濟法則なるもの人間學的再吟味である。例へば、「最小勞費最大効果の法則」、「限界效用均等の法則」、「極大満足の法則」、「グレシャムの法則」等々は、經濟法則といふべく餘りに人間的法則であるのではあるまいか。「最小勞費の法則」は決して經濟學に固有なものではない。また「極大満足の法則」は、種々なる必要に對して限りある手段を最も效果的に按配することを意味するのであつて、この法則に従つたとき、最もよろしきを得た按配が實現されるのであり、そのとき按配者は最大の安心を得ることが出来るのである。よつて私は、「極大満足」といふ言葉をさけて、「完全安堵」の法則とさへ呼びたいやうな氣がする。といふのは、「満足」といふ言葉のもつ東洋的なひびきにとらはれて、「人間行爲における普遍的な理性原理」であるこの法則を、利己的なもの・非倫理的なものとして考へて、果ては、この法則を用ひる經濟學を自由主義・個人主義の限定内にあるものと速断して

了ふ危険があるからである。如何なる目的を設定し、それに、如何様に、與へられた手段を按配するかは、人間的判断であつて、前經濟學的判断とも稱すべきもの、この判断は、「限界效用均等の法則」なる關門を通過して「完全安堵」に到達することによつて、はじめて經濟的行爲に具體化せられるのである。それは、國家理想あるひは政治が、財政を通つてはじめて經濟行爲に具體化されるのと同じである。如何なる財政を編成するかは國家の判断にもとづく前經濟學的事實であつて、編成された財政が購買力として國民經濟に向つて立ち現はれるとき、それは、はじめて經濟學の對象となるのである。財政即ち限界效用均衡表こそは政治が經濟に通ずるために、即ち欲求が經濟行爲に具體化するために、どうしても通らねばならぬ窄き門である。經濟學者は、その窄き門のこちら側だけを取りあつかへばいいのであり、またそれだけを取りあつかはなければならないのである。^(二)そしてこの窄き門は、「人間行爲における普遍的な理性原理」の關所であつて、決して所謂利己主義や自由主義の恣意的設定にかかるものではない。

また「グレンシャムの法則」についても同様の吟味がなされうる。同一の名目價格をもつ異質の金屬貨幣が同時に流通するとき、良貨は悪貨によつて驅逐されるのであるが、公定價格によつて同一の名目價格が強制せられるときは、貨幣の場合に於けると同様に、やはり悪貨が横行して良貨は影をひそめてしまふのである。貨銀についても同じやうな現象がみられがちなのではあるまいか。こゝにいふ人間的事實

が、物に即して、物質的なる制約をうけて、社會的再生産といふ過程^(三)に於いて、現はれるとき、經濟法則として自己を顯現するのである。「需要供給の法則」に關しても、また「價格の本質」に關しても、慎重な再吟味がなされる必要があらう。蓋し、經濟といふことがらも、人間的事實の一面であるからである。^(四)

次に、「科學としての經濟學」といふ問題は、ここに附隨的に論ずるには餘りに大きな問題である。ここでは、それを、楠井隆三教授の力作「理論經濟學認識論」に委ねて、私は、本稿のテーマに進んで行く。^(五)

註(一) L. Robbins, An Essay on the Nature and Significance of Economic Science, 1937.

(二) 拙稿「國民經濟における意志の問題」(早稻田政治經濟學雜誌第七十七號、一一六一七頁、尙同拙稿は本書後篇に第二論文として収録、本書二四〇—一頁参照)

(三) 楠井隆三教授「理論經濟學認識論」一四六頁以下参照。(社會的再生産過程といふ時は經濟學と考ふ)

(四) 經濟學の對象については、右の楠井教授の本を参照。

(五) なほ、これに關する卑見の一端は前掲拙稿(早稻田政治經濟學雜誌第七十七號一〇三一六頁、本書二二四—八頁)参照。

「経済學とスミスとの因縁をおもひながら、その深い縁しが、スミスのすぐれた倫理學的方法から生れ出たものだ、と考へる人は案外にも少いかもしれない。このスコットランド派の哲學者は、倫理學史のうへに特に注目さるべき業績をのこしたあとに、近世經濟學の礎石ともなつた『國富論』をつくり上げたが、この大著における素晴らしい綜合は、彼が卓越した倫理學者であつたことを度外視しては、到底その眞意を理解しがたいものだと思ふ^(一)、といはれるやうに、經濟學者アダム・スミスを理解するためには、どうしても、道德哲學者アダム・スミスを理解してかからねばならないであらう。所謂アダム・スミス問題 (Das Adam Smith-Problem) をはじめとして、スミスに於ける經濟學と倫理學との關聯に關しては、優れた著作や解釋が已に澤山與へられてゐる。最近わが國に於てもこれらに關して幾多の論文著作が公けにされてゐる。私は、ここでは、それらの問題に對する論及をさけて餘りにも毀譽褒貶の甚しいスミス經濟學の中に、人間的性格をさぐつて、一つにはスミスに對する通俗の非難をのぞきたいと同時に、二つには、經濟學の本質の決して利己的でないこと、また自由主義ないし個人主義の限定内にあるものでないことの證據にしたいと思ふのである。

「決して忘れ得ざるハチスン博士」として晩年のスミスが回顧おく能はなかつた恩師ハチスン教授から

彼がグラスゴー大學の學生として聽講した道德哲學は、自然宗教、道德學、法學及び政治論であつて、その講義のある部分がとくに「政治經濟學に於ける興味をアダム・スミスに與へた」のであつた。^(二)そして、この「非常に偉大な・最も感化力ある」恩師のあとをついで、彼が擔當した道德哲學は、自然神學、倫理學、正義論、經濟學の四部門、あるひは、自然神學、倫理學、法學の三部門に分たれてゐたといはれる。いづれにせよ、第二部門の倫理學に該當するものが「道德情操論」であり、最後の部門に關して彼が別の一書を約束し、そして約束の一部分が「國富論」に於いて果されてゐることは餘りにも有名な話である。^(三)そしてまた、かつて、「同情」に立脚する「道德情操論」と「利己」に基礎をおく「國富論」との連絡が、いはゆる「アダム・スミス問題」として大きく取りあげられたのであつたが、それもまた、今日に於ては立派に解決せられて、一見氷炭相容れることなきやうに見えるこの二著作が、實はスミス自身にとつては、「道德哲學」のそれぞれの面の様相を描出したるものに過ぎないと、一般に理解されてゐる。別言すれば、彼の道德哲學の根本問題である幸福論を物的面に於て發展せしめたのが彼の經濟學であつて、「國富論」に於ける彼の最大關心事は、國民の(そしてまた人類の)幸福を如何にして増進するかといふことにあつたのである。彼の幸福論について述べることは、ここでは差し控へなければならぬが、彼に於いては、幸福は心の平靜 (Tranquillity) と物の享樂 (Enjoyment) とに存するのであつて、^(四)健康で負債がなくそして立派な良心があればこれ以上の幸福があらうか、^(五)といふの

が彼の樂觀的な幸福觀の一端である。彼の幸福觀が樂觀的でありうるのは、いふまでもなく彼の世界觀の然らしむるところである。彼は一面幸福を右のやうに精神的に理解してゐながら、而かも他面幸福の物的面として享樂の必要を考へたのである。それは、理神論に基礎をおく彼の豫定調和の世界觀においては、現世における人間の物的幸福もまた神意に出づるものであると同時に、富の追求を媒介として徳が實現されるのであり、また利己的活動を媒介にして社會全體の幸福が増進せられるからである。従つて、彼の精神的な幸福觀と一見矛盾する如くにみえる幸福の物的面である享樂を如何にせば、豊富かつ低廉に得られうるかといふことが問題であつたのである。この問題の攻究がすなはち「國富論」として彼の經濟學の體系を成したのである。^(六)従つて、彼においては、「國富論」は單なる經濟學のための經濟學體系ではなくて、如何にして國民の幸福は増さるべきかといふ社會的熱情の凝集物であつたのである。「國富論」において、富が「生活の必需品及び便宜品」として規定せられるのは、マーカントエイリストが「富は貨幣なり、金屬なり」と規定したことに對する反抗であるのであるが、同時にそれは、彼の幸福觀の必然に然らしめしところであらう。

然らば、スミスは、如何にすればその幸福が最大に得られうると考へたのであらう。それは、已に一般に理解せられてゐるやうに、正義の原則を侵さない限り、各人が各人の自利を追求すればよいのである。^(七)また各人は、被造者に適はしく、謙讓な氣持で自分とそして自分に近い周圍の人々の幸福のみを追

求しさをすればよいのである。^(八)けだし宇宙の偉大なる組織の經營とか凡ゆるものの普遍的な幸福への顧慮とかいふものは、神の仕事であつて、人間の仕事に屬するものではない。人間には、その力の弱さと理解力の狭さとに極めてふさはしい遙かに謙遜な役割が當てがはれてゐる。それは、自分自身の幸福と自分の家族の幸福、および自分の友の幸福と自分の國の幸福とに對する顧慮である。^(九)そうすれば、自然と各人が最大の幸福を得られるやうに、そして社會の美しい調和が得られるやうに、神が「見えざる手」によつてチャント導いてゐてくれるのである。といふのは、人類は神によつて作られ、神の意志は人類に幸福を恵むことにあるのであつて、人類社會には始めから神によつて、調和が豫定されてゐるからである。これが、アダム・スミスの根本的な考へ方であるのである。

そこで考へなければならぬのは、スミスにおける自利心、利己心、自愛心 (self-interest, self-love) である。スミスの經濟學の思想的根柢が彼の道德哲學に求められなければならず、従つて「道德情操論」と絶對に矛盾してならないとするならば、そしてまたスミス自身が「國富論」の中で「正義の原則を侵さざる限り」といふ限定を與ふに至つては、自利心、自愛心もまた、正義の原則にもとりえないものであり、公平なる傍觀者の同情に値しうるものでなければならぬ。そうだとすれば、自利心、自愛心は「適正」(propriety) なるものでなければならず、従つてそれは、「中庸」(moderity) に通ずるものでなければならぬと考へられる。大河内助教は、スミスのみた中等並に下層階級 (middling and

inferior stations of life) に於ては、富への途 (road to fortune) と徳への途 (road to virtue) とは、幸ひにも多くの場合、殆ど同一である。と説明してゐられる。^(十) 何故に自利心が徳性の一つとして承認せられるかについて、大河内助教は、後に引用するやうに、市民社會といふ歴史的條件を重要視せられてゐるが、私は self-interest, self-love といふものの本質を考へてみたい。少し偏奇にすぎるかもしれないが、右の文字を自利、利己といふやうに譯して了ふことに問題があるやうに思はれる。私はむしろ、「自己關心」と直譯する方がよさうにさへ考へられる。といふのは、自利、利己といふ文字のもつニュアンスの中には、不道德的なものがあるからである。我々は、自利、自己と譯して不道德を直感するに反して、彼らはセルフ・インタレストの中に道德的なものをさへみとめるのであるから、彼我の理解の中に餘りにも間隔がありすぎる。セルフ・インタレストが自己目的になり終つて了へば、それが、エゴイステイクなものに轉化して了ふことは當然であるが、そしてまたそれがいはゆる利によつて測定されうることも事實であるが、スマスの言ふセルフ・インタレストの中には、東洋的なひびきをもつ利といふものは少ないのではなからうか。利といへば、直ちに我々は、「王また利を言ふこと勿れ」といふ利を思ふ。併しスマスに於ては、セルフ・インタレストは文字通りに、自己に對する關心といふ意味の方が大きいのではあるまいか。だからこそ、正義 (Justice) や仁恵 (Beneficence) の徳が他人の幸福に對する關心から生ずるやうに、慎重 (prudence) の徳が自己の幸福に對する關心から生ず

^(十一) と言ふことが出来るのである。翻譯の問題は勿論私一人の問題ではなく、「自利心」を「自己關心」と譯し變へて了ふだけの勇氣は勿論私にはないが、併し、日本の「孝」と支那の「孝」とその内容が異なる^(十二)といはれるやうに、假りに利といふ文字を用ひたとしても、その内容については、餘程解釋をかへなければなるまいかと考へられる。

もしセルフ・インタレストを「自己關心」といふ意味にとるならば、スマスが、パンが欲しければパンやの慈悲心や恩恵にすぎることなく、パンやの自利心に訴へる、^(十三)といふ時のセルフ・インタレストは今日通俗に理解されてゐるやうな自利心、自愛心、あるひはエゴイズムではなくて、パンやが自分や自分の家族の幸福に對してもつ關心といふ意味になるであらう。換言すれば、セルフ・インタレストを刺戟せよといふのは、相手方の傲慢不遜のエゴイズムを刺戟せよといふのではなくて、相手方が人間として本然的にもつてゐる自分並に自分の家族に對する關心を上手に刺戟し、相手方の關心事を満足させてやりながら、同時に自分の幸福もえられるやうにせよ、といふやうな意味合ひになるのではなからうか。さうだとすれば、スマス經濟學のエツセンスの如く常に引用される右の言葉は、餘程、一般に理解されてゐるやうな利己といふ東洋的なひびきから救はれうる。東洋的といふよりもむしろ日本的といつた方がより妥當かもしれないが、我々が潔癖すぎる程に利といふことにこだはりすぎるのではあるまいか。どうしてもこだはり勝ちだとすれば、この文字使用をやめるか、またこの文字を使用しなければス

ミス経済學の意圖が表現出来ないとするれば、この文字の解釋にゆとりと幅を残しておくことが必要なものではあるまいか。スミスの言ふセルフ・インタレストは、神によつて造られた人間に固有なもの、本質的なものではあるまいか。神によつて造られたと考へることをやめる人間本位の立場に立つても、人間が個あるひは己といふ形をとるかぎり、自己に對する關心といふものは、決して無くならないのではあるまいか。人間は人の間に在つてはじめて人間たりうるとすれば、他に對する關心も勿論人間の本來的のものでなければならぬが、同時に、人間が個あるひは己といふ單位をとるかぎり、個(己)に對する關心もまた人間に本來的のものでなければならぬ。人間的關心の本質は、對自關心と對他關心との統一にあるのではあるまいか。スミスに於けるセルフ・ラヴも、利己心と譯すことをやめて、^(十四)自愛心と文字通りに譯すべく、そしてその意味も、自重自愛と連ねて使はれる場合に近い意味に解すべく、また「御自愛下されたく」に於ける自愛の如くに——勿論健康の意味に於てではないが——利己からはなれたゆとりのある意味に於いて大きく用ひられなければならないであらう。

そしてそのセルフ・インタレストもセルフ・ラヴもともに、力の弱い理解力の狭い人間に極めてふさはしく與へられた課題として、極めて謙虚に追求されなければならないのである。即ち、修身治國平天下式に、まづ自分と自分の周囲の人々の幸福を、被造者にふさはしく、謙讓な氣持で、考へて行かなければならないといふのである。乃公出でずんば式の大それた傲慢から宇宙の運営や世界の幸福を考へず^(十五)

にまづ靜かに身を修め家をととのへて行きなさい。各人がみんな各自の幸福をうる事が出来るやうに努めれば、社會、國家の幸福は自然と生れて來るやうに神が導いてゐてくれるんです。他人のことは神に任せてまづ自分の生活を安定させなさい。そうすればあとは神がいゝやうにとりはからつてくれるんです。幸福の物的面に對する人間努力は、かくあらねばならぬといふのが、スミスの根本的な考へではあるまいか。

「道徳情操論」の開巻第一頁本文第一行目に、よく引用される次の様な有名な文句がある。"How selfish soever man may be supposed, there are evidently some principles in his nature, which interest him in the fortune of others, and render their happiness necessary to him, though he derives nothing from it, except the pleasure of seeing it." このセルフイッシュを何と理解するか、またプリンシプلزを原理と譯すか衝動と譯すか或はまた本源的な力ないし本質的なものと譯すかは暫らく措くとして、ここにいふインタレスト・ヒム云々は、明らかに他人の幸福に對する關心であらう。ところが、とかくこれがセルフイッシュと對照されて利他、愛他といふ意味にとられやすいのであるが、それは餘りに「アダム・スミス問題」的な理解の仕方ではあるまいか。また註十一に引用した *concern that of other people & concern for our own happiness* と同様に、關心であつて、決して利他、愛他といふ文字が與へるやうなニュアンスはもつてゐないのであらう。併し、この

他人に對するコンサーンをもとく利他、愛他と考へてしまふ性急がある。誤りであらう。セルフ・インタレストを利己と譯して、その日本文字の與へるニュアンスでスミス經濟學を理解する。そして「道徳情操論」に於ける sympathy を「同情」と譯して、同様にその日本的ひびきに或る尊敬を拂つてゐる。そして兩著作の關係を、所謂「アダム・スミス問題」的に、ある偏見ないし成心を以て考へる一種のくせがある。即ち利己といふから利他と對照的に言はなければおさまらないやうなくせがある。Das Adam Smith-Problem といふ問題があるやうに、これは獨り日本語譯に於ける偏見あるひは成心ではなからうが、併し、日本語の「利己」あるひは「同情」が、氷炭相容れ得ない性格を烙印して了ふことは争へない。シンパシイが共鳴、共感あるひは同感を意味して、セルフ・インタレストと絶對的な矛盾をもつものでないこと、それどころか、セルフ・インタレストそのものが公平なる傍觀者のシンパシイに値しなければならぬことは、すでに學界の定説となつてゐる。さうだとすれば、セルフ・インタレストを文字通りに「自己關心」といふ意味に理解して「對自の關心」を現はさしめ、シンパシイを「共鳴、共感あるひは同感」と譯して「對他の關心」を理解せしめたならば、「アダム・スミス問題」も比較的滑らかに解決せられ、そして兩關心が共に人間に本來的のものとして理解せられるならば、スミス經濟學に對する通俗の非難がその的を失ふどころか、スミス經濟學の人間の基礎のゆるぎなきことがかへつて納得されるのではあるまいか。スミス經濟學にかやうな人間の基礎を發見するならば、スミス經

濟學は、通常に理解されてゐるやうな所謂個人主義、自由主義のそれではなくて、それよりもはるかに深いもの、そうしたイズムの向ふにあるもつと人間本質的なものであることが諒解出来る。私はさういふ意味で、スミス經濟學は、所謂何に世界觀といふものにとらはれてゐないものであると考へる。エルト・アンシャウング・ロスとさへ言ひえられるほどに人間本質的なものと考へたいものである。

以上によつて、スミスが從來誤解されてゐる様な個人主義者でないことが明らかとなつたであらう。スミスは我利に盲目であれといふのではなくて、正義の許す範圍に於いてセルフ・インタレストを考へよといふのであり、惡魔のやうに自利を追求せよと教へるのではなくて、神の子らしく、神意にそむかぬやうに、神の許し給ふところに於いて、セルフ・インタレストを追求せよといふのであり、而かも乃公出でずんば式にはなしに、他の一切は神に任せて、まづ自分と自分の家族達の平安を謙虚な氣持で考へよといふのである。そしてスミスが「見えざる手」の導きに調和を期待したのは、いふまでもなく彼の世界觀が然らしめたのである。

然らば、なぜ、かくも謙虚であるスミス經濟學が、個人主義、自由主義、利己主義の權化の如くに非難せられるのであらう。かくも慎重な道徳哲學者アダム・スミスが、百歳の後に不名譽を残すやうな表現を、なぜ、經濟的自由の上に強調したのであらう。

先きに一寸述べたやうに、大河内助教は市民社會といふ歴史的條件を重要視せられて、利己が倫理

であつたことを次の様に説明せられる。「利己心」一般が徳性たり得るか否かが問題であるのではなくそれが『市民社會』の展開といふ特殊な經濟的條件の下に置かれた場合にはじめて具體性をもち、社會的な徳性として妥當性を獲得するに至るといふ點を理解することが問題なのである。經濟生活に於ける『利己的』活動そのものは、中世社會に於ては勿論一つの背徳的な行爲であつたのみでなく、背信的な態度であつた。……〔然るに〕經濟生活が近世初期の專政君主の手を藉りてそれ自らのための展開の地盤を固め、統一的な國內的經濟領域『市場』の創設に進むにつれて、漸次に所謂『市民社會』は新たな田園都市——舊商業都市に對立するものとして——を中心に成長し始めたのである。此處に於て『利己心』は始めてその具體的な足場を獲たことになり、理論的に前提された衝動は始めて歴史的な規定をうけ『營利心』として、『一物を他物と交換せんとする人間自然の性向』として、現はれる。……『利己心』一般はたゞ此の歴史の發展の線に副つて利己的であり鬭争的である場合にのみ、始めて徳性に連らなるのであり、本能自體がひとつの新しい徳性の根據となるのである。この『金錢づくの社會』この所謂『時代の宿命』たる『經濟時代』に於て、充分に利己的でない者は、かへつて經濟社會に於ける公共の福祉の増大を妨げることとなり、社會の生産力の充分なる展開を阻止することとなるのであつて、その限りに於て、かゝる人間はかへつて時代の倫理に適はざるものだと非難せられ得る^(十六)これは、アダム・スミスが繰り返へし述べたところであつて、かやうにして、スミスは、「經濟人の經濟學を打ち樹てやうと

し、營利活動に徹することのうちに新しい徳性の成立を求めようとした^(十七)のであるといふのが同助教授の説明である。尙ほ、同助教授は、中等並に下層階級の人々の性情に於ては、徳への道と富への道が幸ひにも同一である所以を、「道徳情操論」の中から引用し詳細に説明してゐられる。

スミスが重商主義に眞向から反抗して完膚なきまでの攻撃を之に加へるところと合せて、同教授の説明には十分に納得出来るものがある。併し私に一つ疑問として残るのは、「自己心」一般といふもの内容である。この「利己心」一般は、いはゆる利、即ち東洋的なひびきにおける利であるか、それとも私が考へようとするセルフ・インタレスト即ち自己關心であるか、といふことである。セルフ・インタレストが、市民社會に於いては、いはゆる利となつて現はれるといはれるのであらうか。

スミスが誤解せられるほどにセルフ・インタレストの追求を強調したのは、一つには、たしかに市民社會あるひは商業社會の成熟といふ歴史的條件が存在したからであり、二つには、スミス自身のもつ社會的熱情が、かゝる歴史的條件に恵れて、重商主義否定といふ旗印のもとに、心ゆくまで燃されたからであり、三つには、スミスのもつ世界觀が豫定調和に徹してゐたからであると考えられる。彼の世界觀に於いては、事物には自然の成り行きがあるのであつて、それは、神が人間の幸福を念願してそう造つてゐてくれるものである。従つてこの自然の成り行きに従ふことが、最も自然で、最も合理的で、最も調和的で、しかも最大の幸福が人間に保證せられる所以である。然るに重商主義は、神意に背いてこの自然の

成り行きに妨害を加へ、以て人間に堪え得ざる不幸を招來したものである。この重商主義を徹底的に爆碎せずば、何を以て人間に幸福を招來することを得ようかといふのが、スミスのもゆるが如き社會的熱情であつたのであらう。その熱情が迷つてレセ・フェールの主張となり、セルフ・インタレストの強調となつたのであらう。そして而かもスミスには、神は人間をあざむいてセルフ・インタレストを追求せしめ、以て社會全體の幸福を實現しようとさへしてゐるといふ程に、神に對する信頼があつたのである。そしてまた中世の自己否定の倫理に對する自己肯定の主張が、彼および彼の育まれたスコットランド學派の倫理觀であつたのである。これも第四の理由として掲げることが許されよう。

以上の四つの事情がスミスをして、必要以上と思はしめるほどに、セルフ・インタレストの追求を是認あるひは獎勵したのであるが、併しスミスにおける經濟學の本質は、さきにも一寸觸れたやうに、自由主義、個人主義等々の如きあるイズムの上に存在するものではなくて、人間の本質の上に存在するものである。「自己關心」なるものは、個人主義なるが故に是認せられるのではなくて、人間に本質的なものが故に是認せられなければならないのである。スミスの經濟學が著しく實踐的であるといはれることの中には、二つの意味がありえよう。一つは市民社會に即するといふ意味に於て實踐的であり、二つには、もつと深く人間に本質的であるといふ意味に於いてより實踐的であるといふことである。私は、スミス經濟學といはれるものを二つの部分に分けて、右の二つの意味に於ける實踐性を考へてみる。「國

富論」の大部分をしめる政策的主張は、重商主義批判にその典型がみられるやうに、いはゆる自由主義なるイズムに基づく強調であるが、「國富論」第一編にみられる論述は、自由主義や個人主義なるイズムに基づく分析や解明ではなくて、人間本質に關する論述である。こゝにみられる本質論は、獨逸流にいへば、理論篇 (theoretischer Teil) に屬するものであつて、それは、無世界觀的ウニウルトアンシツクニヒスとさへいひうる程に、科學的であつて、決して通俗に理解されてゐるやうな個人主義や自由主義の限定内のもではない。「國富論」の中の政策的主張は、自由主義あるひは個人主義といふイズムの主張なるが故に、極めて歴史的實踐的であるが、理論篇ともいふべき第一編における論述は、人間に本質的なものについての論述なるが故に、本質的實踐的である。私は、自由主義 (liberalism) といふものは、歴史的な概念であり、人間に固有なる自由 (Freiheit, Freedom) といふものは、絶對的概念といふか、非歴史的な概念であると考へる。スミスに於ては幸ひにその兩者の間に極端の矛盾がなくて済んだのである。當爲と存在との間に大なる喰ひ違ひがなくて済んだのである。それは、彼が住んでゐた社會の歴史的條件が彼に恵んでくれた最大のものであつたらう。ところが、一口にスミス經濟學といつてしまつて、この二つの部分、即ち二つの實踐性を混同して、スミス經濟學を自由主義の限定内に押し込んだり、或は非倫理的なるものの權化のやうに誤解してゐる場合が多いやうに考へられる。スミスにおいては、歴史的實踐的なるものに關する限り、それは極めて國家的見地に立つものであつて、^(十八)リストをして、「余をしても

し英國に生れしめなば、余もまたスミスの經濟學を説いたであらう」といはしめたところのものである。そして、本質的實踐的なるものに關する限り、それが、經濟學の鼻祖としてスミスが永遠に尊敬せられなければならぬ所以となるところのものである。私は、いはゆるスミス經濟學の中の歴史的實踐的なる部分を自由主義的といふことには勿論躊躇しないが、本質的實踐的なる部分を同様に理解してしまふのには、多大の躊躇を感じる。それは、私が、經濟理論といふものは、いはゆる何々主義といふものから離れて無世界觀的でありえようと考へるからである。私はかう考へる、スミスは自由主義者であつたからレセ・フェールの政策を強調したのであるが、その理論的部分は人間本質論的な立場で構成されてゐるのではあるまいかと。交換のプロペンシティもセルフ・インタレストも自由主義や個人主義の外にあるものとして考へられてゐるのではあるまいか。私は科學は無色でありうると考へてゐる。併しそれを用ひる人が有色であるために、その人の色が科學の色として誤認される場合が多いやうに思はれる。たとへば、自然科學は無神論といふ色からは無縁である。併し、無神論者達は——この人々は、神無しといふ證據が得られたから無神論者になつたのではなくて、はじめに神無しと信じた人々である——無神の證據に自然科學を利用する。また教會の權威に反抗した人々は、その武器として自然科學を利用した。自然科學こそいゝ迷惑であつた。そのために、自然科學に無神といふ色が焼きつけられてしまつたのである。併し、科學は無色でありうるのではなからうか。科學は無色なるが故に力をもつ

であるが、その力が意味をもつのは、科學を利用する人々の有つ色の故に、無色が揚棄せられる時においてではあらう。併し、科學は科學としては、無色でありえよう。「國富論」に於ける第一編の理論的部分は、まさにその無色の領域に屬するのではあるまいか。そしてその無色さは、人間に本質的であるといふこと、人間に本來的であるといふことから生ずるのではあるまいか。セルフ・インタレストもまたかゝる性質のものではなからうか。

かやうに理解することによつて、スミス經濟學をその非難から守りうると同時に經濟理論なるもの人間的基礎が諒解出来るやうに思はれる。そしてはじめて科學としての經濟學の存在が確認されうるやうに考へられる。

尙ほ書きつくべきもの、多く感ずるのであるが、時間の限定に強制せられて無雜のまゝに筆を擱く。

註(一) 杉村廣藏博士「經濟學方法史」二二頁。

(二) 久保田明光教授「道徳哲學體系」に現はれたるフランス・ハチソンの經濟理論(早稻田政治經濟學雜誌鹽澤博士古稀記念號、第六九・七〇號、三一六頁)。尙ほ教授の論文が表題の如き問題を最も理論的に取扱へる唯一のものとして讀者の参照を熱望してやまぬ。

(三) 「道徳情操論」第六版の前書(Advertisement)の中に、スミス自身がつきりと次の様に書いてゐる。
In the last paragraph of the first edition of the present work, I said that I should in another discourse endeavour to give an account of the general principles of law and government, and of the different revolutions which they had undergone in the different ages and periods

アダム・スミスに於ける自利

of society: not only in what concerns justice, but in what concerns police, revenue, and arms, and whatever else is the object of the law. In the Enquiry concerning the Nature and Causes of the Wealth of Nations, I have partly executed this promise: at least so far as concern police, revenue, and arms.

- (四) Adam Smith. The Theory of Moral Sentiments, 11th Edition, Edinburgh, 1808, vol. I, p. 348.
- (五) Moral Sentiment, 11th Ed. vol. I. p. 100.
- (六) 大道安次郎教授「スミス経済學の生成と發展」第二章參照。
- (七) Wealth of Nations, Cannan's Edition. vol. II, p. 134.
- (八) 大道教授前掲書七三頁。
- (九) Moral Sentiment, 11th Ed. vol. II. p. 112-3.
- (十) 大河内一男助教授「アダム・スミスに於ける倫理と經濟」經濟學論集十一ノ一、十四頁。(岡氏著「スミスとリスト」に收録)
- (十一) Moral Sentiment, 11th Ed. p. 178.
Concern for our own happiness recommends to us the virtue of prudence: concern for that of other people, the virtues of justice and beneficence.
- (十二) 津田左右吉博士「儒教の實踐道徳」參照。
- (十三) Wealth of Nations, Cannan's Ed. vol. I. p. 16.
- (十四) 大内兵衛氏譯「國富論」(一)岩波文庫 四〇頁。
- (十五) 「社會の福利のために事業をするやうな風をした人々によつて多大の福利が齎らされた例を、私は未

だ會つて知らない」とスミスは言つてゐる。重商主義者達に對する皮肉であらうか。(Wealth of Nations, Cannan's Ed. vol. I, p. 421)

(十六) 大河内助教授前掲論文 一〇一一頁。

(十七) 同上 七頁。

(十八) 「國防は富裕よりも重要ななり」と云つて、航海條令を讚美してゐるあたりのスミスを考へてみよ。

(Wealth of Nations, Cannan's Ed. vol. I, p. 429) またスミスの愛國心に關しては、白杉庄一郎氏の經濟論叢五三ノ一所掲の論文をみよ。

(早稻田政治經濟學雜誌第七十八・九合併號所掲)

自由競争の再吟味

私は前々號の本誌に、アダム・スミスのセルフ・インタレストを「自己に對する關心」と理解して出來るかぎり「利」に囚はれることから警戒し、以つて、經濟學の本質を個人主義、利己主義とする曲解から極力自由でありたいと努力した。本稿において更に私は、表題に示したやうに、自由競争の再吟味といふ陳腐な努力を繰り返して見ようと考へる。といふのは、自由競争といふ言葉ぐらひ人口に膾炙してゐるものはないが、同時にそれ故にまたこの言葉ぐらひ種々雑多な概念を盛られてゐるものもなからである。Herbert Somerton Foxwell も言つてゐるやうに、「英國人にとつては競争 (competition) といふことほど、科學上の概念としてもまた我々の日常生活の一特徴としても、親しみ深いものはないと言つてよい。實に競争といふ事實は吾々の經濟活動の大部分を構成し、そしてこの競争といふ概念の上に吾々の經濟理論の大部分が打ち建てられてゐるのである。然るにも拘はらずこの競争的闘争 (competitive struggle) の性質に關して全く反對の意見が主張せられて居り、また經濟學者達もこの

言葉の科學的意味における定義づけを注意深く企ててもゐないのである。」自由競争の意味を經濟的に最も正確に定義づけたといはれるオグユスタン・クールノー (Augustin Cournot) も、「競争の作用に就いては何人も漠然たる考をもつて居る。これを一層明確ならしめることは理論の當に努むべきことである。而も經濟學者は問題を適當なる見地より觀察しなかつた爲に、又その使用を不可缺とする符號に依頼しなかつたが爲に、この點に關しては通俗の見解に一步をも進めて居ない。これ等の見解は、學者の著述に於ても通俗の用語に於けると同様に拙劣に定義せられ、又拙劣に應用せられて居る」と述べてゐる。まことに自由競争といふ言葉は社會の凡ゆる人々によつて餘りに愛用されすぎて來てゐる。

自由競争あるひは自然淘汰といふことがらが、人間生活における一つの——全部ではなくとも——原則であるかぎり、そして、それが庶民階級の人々に極めてアトラクティブになつた時代から、この言葉が社會生活においても學問の世界においても金科玉條として尊重せられたことは當然であらうが、またそれ故にこそ「領解濟み」のことがらとして、あるひはタブーの如きものとして、嚴密なる科學的定義を必要とする場合にも何らの概定規定を加へられることなく、ただ尊重愛用されて來たのである。こゝに、經濟學だけでなく日常生活における我々の判斷をも混亂せしめる要因が伏在してゐるのである。

經濟學における自由競争はその理論が依つて立つ一の假設ないし一の理念型 (Idealtypus) に過ぎないのである。然るに通俗には、現實生活における「力くらべ」あるひは「強いもの勝ち」とこれを混

同じ、現實の競争の制限を以て直ちに經濟生活の破壊ないし人間性の否定と速断して不必要な杞憂にも耽つてゐる。また、統制の進展と共に經濟學の終焉すべきを運命づけてゐる論者も多い。更には、自由競争は自由主義と共に存在し、自由主義なくして自由なしとさへ盲断してゐる人々もある。私は、經濟學における自由競争と人間生活における「力くらべ」ないし「強いもの勝ち」とは、本質的に異なるものであること、前者をもし「經濟學的自由」と呼び後者を「人間的自由」と名付くるならば、經濟學的自由は經濟學における一假設ないし一理念型にすぎないが、人間的自由は人間に固有なもので人間に本質的なものであること、假りに前者の假設が否定されたとしても、後者の存在は微動だもせざること、更に經濟學が自由主義や個人主義と運命を共にするものでないことは言ふまでもないが、リベリズムといふイズムが亡くなつたとしても人間に固有な自由 (Freiheit, Freedom) といふものは、人間の存在と共に永遠であることを、考へたい。

人間的自由が如何なるものであるかを私はここに論じえない。それは私の専門の外にもあるし力の向ふにもあるからである。併しかういふやうな氣がする。禍を轉じて福となし、苦を樂の種とするところに人間の自由と創造があるやうに思はれる。單なる勝手氣儘でなしに白を黒にかへる勝手が眞の自由であり眞の創造であるやうに思はれる。白が白であり、黒が永遠に黒であるとするならば、失敗は永遠に失敗であつて決して成功の基に化することは不可能であらう。失敗を成功の基に化することを通俗には

「經驗を生かす」といふが、經驗が過去のものであり既に形成せられたものであるとすれば、それは再び抹消し得ざるもの動かざるものである。その動かざる抹消し得ざるものを抹消した以上のものとして動かして行くところに、別言すれば、成れるものを成るものに化するところに、過去を將來に通ぜしめるところに、現在における「生かす」といふ働きがあるのではあるまいか。更に思ふに、人力の有限の承認が諦めであらう。この諦めのなかにおいて有限の人力を最高度に利用するところに戦ひがあるのであらう、そしてこの戦ひのなかに自由があり創造があるのであるまいか。といふのは、この戦ひによつて不可能が可能になり、有限が無限に通ずるからである。「憂きことのなほこの上に積れかし、限りある身の力ためさん」と歌つた家康が血みどころの精進と努力によつて遂に天下を取つたとすれば、まさに人間世界における無限を有限の人力を以て實現したことになるのではあるまいか。家康においてはまさに有限が無限に通じたのである。家康が大なる自由を享受したことは言ふまでもなからう。白を黒にかへ、有限を無限に通ぜしめるところに人間の自由と創造があるとすれば、そして「艱難汝を玉にす」といふ諺が眞實であるとするならば——哲學が非常に通俗化されて一般の確信に到達したものが諺であらう。哲學が誰でもの耳に入り、誰でもの頭に泌み込み、そして誰でもの口から出て來るときに、哲學は諺とかはるのであらう——自由は人間に本質的に固有なものはあるまいか、しかも與へられた條件がより困難であればあるほどより大なる自由と創造の可能が惠まれてゐるとさへ、逆説のやうだが、

言ひうるのではなからうか。私は人間的自由といふものを右のやうに考へようとしてゐる。この極めて粗雑な考を極めて精緻な哲學的叙述にまで高めることは、私に於ては不可能である。ただ私は、經濟學上の自由競争が人間に固有な自由と本質的に異なること、自由主義が亡びても自由は決して亡くならないといふことを、學者でなしに俗人に納得してもらひたいために敢て下手な横道に一寸入つてみたのである。人間的自由が無制限の思索と無制限の訓練によつて生み出す創造にあるとするならば、經濟學的自由は果して如何なる性質のものであらう、本稿の目的がその探究にあることは前述の通りであるが、^(一)とくに本稿においてはラッツラッフ (C. J. Ratzlaff) の「自由競争理論」(The Theory of Free Competition) を一應の手掛りとして進んで行かうと思ふのである。ラッツラッフの主張の中にも勿論曖昧な諸點もあれば行き過ぎもある。併し極めて示唆に富んだ犀利な觀察が私には非常に興味深く思はれる。そして人間的自由との相違を一目瞭然たらしめるに極めて役立つ解釋として多大の興味と効果が期待せられる。敢て利用する次第である。

因みに前に關説したクルノーの自由競争の説明をこゝに引用して比較考察の一助とする。各部分生産量 D_k が、單に總生産 $D = F(P)$ に關してのみならず、その微係數 $F_k(P)$ に關しても亦目立たざる大いさとなつて、部分生産量 D_k を D より控除しても商品の價格に現はれる變動を認め難きに至れば、競争の作用はその極限に達したものである^(三)。この數學的展開がこの文章に續いてあるのであ

が、こゝにはそれを省略しておく。更らにワルラスの叙述を引用してみよう。「競争の點から見て最もよく組織化された市場は、賣買が例へば仲買人、才取等の如く賣買を集中する仲介者に依りて行はるゝ市場である。従つてかゝる市場では、如何なる交換も、其條件が公にせらるゝことなく行はれ得ないし賣手が互にヨリ安く賣らんとし、買手が互にヨリ高く買はんとすることなく、行はれ難い。株式取引所、商品取引所、穀類取引所、魚市場等は、實にかかる働き方をなす市場である。……此らの市場に於て此らの賣買は如何にして自ら成立して行くか。其法則を我々は知らうとする。此目的を以て常に私は、競争の點から見て完全な組織をもつてゐる市場を假定する。これは、純粹力學に摩擦のない機械を假定するのと同様である^(四)。これを更に説明して有井治教授は、「競争とは商品の賣買に關して行はるる完全競争 (complete competition) を指し、多數の買手と賣手とが相互に獨立して競争しながら、而も他人が如何なる價格で賣買せんとしつつかあるかに就いて十分の知識を有し、他人よりも高く買ひ又は安く賣うるといふ様な事の起り得ない關係に立つてゐる事、換言すれば買手賣手の雙方が共に市場の狀況 (market condition) を知悉してゐる事を指稱する。詳しく云へば、(一)多數の買手相互の間と、(二)多數の賣手相互の間と、更に(三)斯る多數の買手と賣手との相互の間に競争の行はれてゐる事を意味する^(五)」と言つてゐる。若し有井教授のやうに説明するとすれば、蛇足かもしれないが第四に次のやうに付け加へておいた方がよいやうに思ふ。(四)そしてその多數の賣手と買手の中の一人或は數人

がその賣買關係から脱落しても商品の價格に殆ど認めうる變動の起らない事を意味するのであると。さて次にラッツラッフの考へをみて行かう。

- 註(一) C. J. Ratzlaff, *The Theory of Free Competition*. University of Pennsylvania press, Philadelphia, Oxford University press, London, 1936, の扉裏參照。
- (二) Augustin Cournot, *Recherches sur les Principes Mathématiques de la théorie des richesses*, Paris, 1838, 中山伊知郎教授譯「富の理論の數學的原理に関する研究」(岩波文庫) 一一五頁。
- (三) クールノー前掲譯書 一三一頁。
- (四) Léon Walras, *Éléments d'économie politique pure*, 1^{re} éd. 1874-77, 4^e éd. déf. 1900. 手塚壽郎教授譯「純粹經濟學要論」六二—六三頁。同教授譯「Élément d'économie politique pure ou Théorie de la richesse sociale. Paris et Lausanne, 1925 に依つてゐる。
- (五) 有井治教授「自由價格と統制價格」五頁、一五頁。

二

先づラッツラッフが如何なる態度と方法を以つて問題に接近して行くかを見て行かう。

「經濟學的意味に於ける競争の定義は、斯學の一般目的と一致しなければならぬ。この目的は欲望満足
の増大である。生産要素の移動可能性 (mobility of the factors of production) は満足増大の必須

條件である。然りとすれば、移動可能性は競争の本質であると言ふことが出来よう。移動可能性の最も根本的な必須條件は、稀少性 (scarcity)、欲望の最大満足 (utilitarianism)、場所と行動を異にするにつれて生ずる報酬上の差異に関する完全なる知識、生産要素の完全なる分割可能性 (divisibility)、種々雑多な社會諸制度の中和化 (neutralizing) である。此らの必須條件の存在は、政府の側における積極的な政策に依存してゐる。通俗の確信とは反對に、經濟學的意味における競争は、放任政策 (let alone policy) の結果廣く存在するに至るものではなくて、寧ろ却つて統制計畫 (program of regulation) によつて廣く普及するに至るものである」と。従つて生産要素がより大なる移動可能性をもつ限り、より大なる競争が存在するものと言ひ得られるのであらう。

これがラッツラッフの根本的主張であるが、彼は更に、一學説の起れる時代の經濟狀態、政治狀態、社會狀態及びその著者が最も關心してゐた當の問題の性質等を最も綿密に考慮して、その著者の眞に意味するところを把握せねばならぬと警告して、自由競争に関する興味ある學説史的考證を行つてゐる。^(二)例へば、スミス、リカルド、ミルその他の人々の自由競争意見を吟味して、彼等の何れもが自由競争をば直ちに政府の無干渉あるひは自由放任と同一視したり、また競争の制限を排斥したりするものでないことを豊富な引用を以つて力説する。特にマーシャルのために設けられた一章には頗る示唆に富むものがあるやうに思はれる。これらの學説史的考證による自由競争理論の發展の跡づけは暫らく後に譲つて、

我々はラッツラッフが自由競争の經濟學的本質を把握するために、通俗に混用されてゐる似而非語を明解に整理して行く水際だつた手ぎわをみよう。

ラッツラッフは先づ「競争」または「自由競争」が「自由放任」(laissez faire) あるひは「個人主義」(individualism)と同義語でないことを指摘する。彼に従へば、自由放任即ち國家干涉の不存在は、經濟活動の如何なる部面にも決して存在しなかつたし、またそれはむしろ時と所と共に異なる國家政策の表現に過ぎないものでさへあるのである。この自由放任政策は、その結果生ずる競争——經濟學的意味に於ける——の増減と共に進退するものであつて、この政策の行はれる時と所の諸條件に全く依存してゐるものである。個人主義といふ言葉は自由放任といふ言葉よりもつと頻繁に自由競争といふ言葉の代りに用ひられてゐる。自由放任に關して説明した上述のことがらは、そのままに個人主義にもあてはまるものと考へられる。思ふに經濟學的意味における個人主義とは、凡ての創意 (initiative) が各私人の中に胚胎するものであり、凡ての組織はその私人達の自發的合意によつて作り出されるところの産業制度を意味するに過ぎないものである。然りとすれば、普通の俗用語における競争と經濟學的意味における競争との交替的使用が、別言すれば、後者の正確な内包を把握し得ざることが、如何に誤れる見解を招來するかは多言を要せざるところであらう。^(三)因みに、彼等が經濟學的意味における功利主義 (egoitarianism) を「欲望の最大満足」と明確に定義してゐることも極めて興味深いものがある。^(四)

次にラッツラッフは「競争の形式」と「競争の結果」とを峻別する。前者は競争する諸單位の數と大きさを意味し、後者はこれら諸單位の活動から生ずる満足を意味してゐる。經濟の歴史は言ふまでもなく我々の經濟制度の進化變遷の歴史である。従つて競争の結果と競争單位の一特殊形式とを同一視することは明白に誤謬である。人間の欲望、環境及び技術における諸變化は我々の經濟制度の構造における諸變化を必要ならしめる。而してこれらの諸制度は目的に對する手段に過ぎないから、第一義的な問題は結果即ち欲望満足ないし社會的實益にあるのである。兩者の混同はウェツプ等において最も明瞭に見られてゐる。彼等は現代の産業組織における競争の減少を指摘し、その證據として所有權の集中、資本の支配、及び生産單位數の減少をあげてゐる。併し彼等は競争の結果即ち生産數量の増加、生産品の質的向上については眼をふさいで平然としてゐる。ロバート・リーフマンも言つてゐるやうに、市場に澤山の賣手の居ることだけが自由競争ではない。マーシャルは、「自由競争の齎らす諸利益の中その本質的なものを維持しておくためには、人々は喜んで個人企業及び半官半民企業の上に極めて廣汎な國家統制を許すであらう」と言つてゐるが、競争の本質は、單に競争する諸單位の數や大きさには存しないのである。競争の形式と性質とは、他の社會制度と同様に、時と所とに相關せるものである。産業的環境の擴大と共に個々人の自由競争も非常な修正をうけてゐる。競争單位は個人的なものから仲間組合的なものに、更らに大團體的なものに發展してゐる。そしてその結果、被備者相互間、備者被備者間、備者間

相互、生産者消費者相互間の關係が著しく變化せしめられたことも言ふまでもない。而かもこれら諸關係は經濟組織の變化以外の他の社會制度の諸變化によつても修正をうけてゐる。競争的關係といふものは斯様に四重の關係であるが故に、その一面のみをみて、特に個人間の自由競争の破壊を眺めて、一般的觀察を下すことは極めて危険である。我々はこの四重の關係を仔細に考察して判断を下さなければならぬのであるが、そのためには前に述べたやうに、競争の形式と競争の結果とを峻別しなければならぬ。前者即ち競争單位の大きさと數とは、後者即ち此らの競争單位が生産する效用、満足、及び機會の指標となるものではない。競争單位の大きさが増大しその數が減少したから競争は減退したと考へるのは、實體と媒體とを取り違へる誤謬である。^(五)

次に絶対に混同してならないのは、理論上の一つの要請 (postulate) としての競争と政策上の一つの戒律 (precept) としての競争と實際上の一つの制度 (institution) としての競争である。論争に次ぐ論争といふものは、此ら三者の競争が本質的に異りたる諸目的に向つて用ひられてゐるといふことを認識し得なかつた故に惹き起されたものである。この三つの意味の競争を必要ならしめた諸目的を吟味することによつて問題の本質に近付かうとするのが、次にとるラツツラツフの態度である。

理論上の一つの要請としての競争。 思ふに社會科學の本質は社會諸現象の因果關係が最も明瞭に表現されうるやうな簡單化 (simplification) の過程を必要とする。經濟が一つの科學として存在しう

るのは、それが急激且つ複雑なる諸變化の中から普遍性 (universality) と永久性 (permanency) に近い或る諸力を孤立化せしめ得たからである。而して經濟的推理及び諸原則が次の二條件を完備するときに極めて嚴密であることは言ふまでもない。即ち第一に、普遍的且つ永久的なる諸力の凡てが經濟學的諸原則の形成に使用包含せられること、第二に一時的な諸力が測定され、その永久的諸力の上に及ぼす影響について適當の考慮斟酌が加へられること、これである。併し社會生活は、絶対に普遍的なる諸力をも絶対に永久的なる諸力をも包含してゐないとするならば、經濟學的諸原則は、「普通の諸法則」と云ふよりもむしろ、「傾向の叙述」 (statement of tendencies) と言はなければならぬであらう。若しさうであるとすればそれ故にこそ、我々の經濟學的推理において、要請 (Postulate) を使用すること、即ち若干の命題 (propositions) を正しいものとして想定することが必要となるのである。そしてその一つが我々が今問題としてゐる競争であるのである。ジョン・スチュアート・ミルが「經濟學は競争原理に依つて始めて科學としての體裁を整へた」といつてゐるが、それはまさに上述の意味においてである。従つて我々が經濟理論において到達するところの諸結論は、我々の諸前提 (premises) が普遍性をもつ範圍内においてのみ、更に斯様な諸前提が作用する諸力の凡てを包含する限りにおいてのみ、絶對的な眞實さをもつものであることは、留意すべき重要な事柄である。我々の結論は我々の出發する前提の上においてのみ完全に健全であるにすぎないのである。我々の經濟學的結論の全部がそのままに眞

實であることは出来ないが、何の程度まで諸要請が現實に接近してゐるかを理解するならば、我々の結論が極めて重要であることは言ふまでもない。我々が理論上の一つの要請として競争を假定することは方法論上の必要に基くものである。演繹法の目的即ち簡單化それ自體は、經濟生活における基礎的な諸力の作用を極めて明確な輪廓の中に取り入れようとする努力である。この努力の目的は、「經濟人」(economian) に依つて例證される人間動機における支配的な力を經濟學者が假定すると同じである。それが現實における人間の眞の象徴として *homo oeconomicus* を創造するものでないことは言ふまでもない。以上の叙述によつて、理論上の一つの要請として競争を假定することが、政策上の一つの戒律として競争を用ひることと、何ら必然的な關係のないことが理解せられたであらうと思ふ。我々は進んで後者の意味をたづねてみよう。

政策上の一つの戒律としての競争。此の意味における競争は自由放任 (*laissez faire, laissez passer*) の擁護において現はれたものである。マーシャルに従へば、レセ・フェールの本來の意味は何んな商賣でも何んな製造業でも好きなものをやつていいとの自由に關するものであり、レセ・ベセは何處へでも何處からでも好きなやうに品物を運んでよいといふ自由に關するものである。レセ・フェールはその本來の意味においても亦もつと近代的な使用においても、個人對個人の關係を現はすものではなくて個人の國家に對する關係を現はすものである。レセ・フェールは飽くまで政策 (*Policy*) であつて、個

人の行爲のプログラムである。この點についてシヂウィツクは極めて明瞭な叙述を與へてゐる。「價格、賃銀及び利潤が個々人の自由競争に依つて決定されるとするとき、此等を決定するその法則を探究すること」、自由競争行爲を制限あるひは修正することが何の程度に望ましいかを研究することとは、本質的に異なるものである。假令その制限あるひは修正が慣習の力に依らうと博愛の精神に基かうとまた政府の立法や組合の自由意志に依らうとも。純粹に科學的である經濟學者は、完全なる自由競争に依つて造り出される傾きある諸結果を先づ第一に研究するものである。併しそれは彼が斯ういふ事物の秩序に對して何らかの偏愛をもつからでは決してなくて——といふのは科學はかかる撰り好みに關知しないからである——簡單であればあるほどその本質把握が容易であるに過ぎないからである。彼は、研究の順序においては、これらの簡單な諸關係に關する知識の方が、妨害的な諸原因によつて著しい修正をうける競争から現實に生ずるところの複雑な經濟問題の探究よりも一步前に先在するといふことを知つてゐる。併し、完全に自由であり完全に作用するところの競争を——一般的推理の便宜のために、現實の社會が提供するところの經濟的事實を簡單化する手段として——科學的理想としてかかげることは、毫もその中にそれを實際的理想としてかかげることを含んでゐないのである。」然るに科學的理想即ち科學上の理念型が實際的理想即ち現實の政策と混同されて、經濟學の諸著作の中に多くの誤解を導いたのは、それは、自由競争及び政府の無干渉がアダム・スミス以來の經濟學說の裡に中心的な地位を占め

てゐるからである。經濟學說の中に自由競争が斯様な地位を占めたのは、それは、近代の經濟社會の顯著な特徴が権力の著しい衰退と自意志主義 (voluntarism) 即ち合理的なる自己指導 (rational self-direction) の著しい擡頭であるからである。Sir Henry Maine は進歩的な社會を「身分から契約へ」(from status to contract) の運動と叙述してゐるが、まさにその通りであつた。自由競争が政府の干渉によつてのみならず、慣習の力その他の諸要因によつて制限されることは言ふまでもないが、併し他方、政府干渉の擴大こそが情勢と習慣の権力的支配を否定して、自由競争のための地ならしをしたことも忘れてはならぬ。何れにせよ、自由競争の假定の上に立つ經濟理論が、他の如何なる假説から引き出された結論よりも、近代産業の現實によりよく適したことは疑ひ得ないところであつた。一つの要請としての競争が經濟學說の中に占めて来たところのこの中心的地位が、要請としての競争と戒律としての競争との間に必然的な關聯を推論せしめるに至つたのである。恕すべきといへば恕すべき點もあらうが併し、科學者としての經濟學者は飽くまでその誤れる關聯に大なる責任をとるべきであらう。經濟學者達がこの誤れる推論に立ち至つたのは、彼らがアダム・スミスの重商主義攻撃とジョン・ステュアート・ミルの「自由論」にすつかり感染して、經濟現象の研究と經濟法則の發見に満足せずして、政府の政策に關心し、「現にあるもの」と「あることを要するもの」とを混同したからである。若し彼らが輕率にザインとゾルレンを混同したのでないとなれば、彼らは紅き理想ゾルレンの焰をもつて冷たかるべき現

實ザインの青き色を焼きつくさうとしたのである。彼らの熱情は諒とすべきも、經濟學が囚はれたるに
おいては同一である。

實際上の一つの制度としての競争。此の意味における競争は、自然淘汰と適者生存による生物の進化を、社會の進歩にあてはめたときに用ひられる。ベンジャミン・キッド (Benjamin Kidd) はその著「社會進化」の中で、「生命の發生當初から進歩は到る處で全く同じ方法によつて成し遂げられて來てゐる。そしてそれは他の如何なる方法を以つてしても可能でない。進歩は淘汰と排斥の結果である。

換言すれば、生命の法則は常に初めから同一であつて、それは、絶えざる・避けえざる闘争と競争、(ceaseless and inevitable struggle and competition) 絶えざる・避けえざる淘汰と排斥、そして絶えざる・避け得ざる進歩である」と述べてゐる。更らにスペンサー (Herbert Spencer) の競争の使用も生物學的制度の意味においてであつて、彼においても、經濟生活における競争と生物的的生活における競争との同一視が主張せられてゐる。「動物は同種族のもの或は他種族のものと競争状態におけるときに、素質の良いものが繁榮し素質の悪いものが衰滅して行くのである。同様の事柄が人間社會におこらないと誰が主張しよう」と。言ふまでもなく社會進歩は人間精力の犠牲においてなされる。併し不思議なことは、スペンサー派の人々が、生物學的闘争の結果としての進歩に人間精力の大なる浪費の存することを理解しないことである。人間のみがなしうる闘争の意識的規則が如何に大なる利益を齎らす

かが全く無視されてゐるのである。スペンサーの見解は、競争に関する経済學的著述の中に非常に大きな影響を興へてゐるのであるが、生物學的闘争——淘汰と排斥——に関する競争を、個人間の自由契約的経済關係に翻譯してしまふところに誤謬と不可思議が存在する。自由契約的経済關係の制限が直ちに経済學的競争の減退を意味するとする見解は、この誤謬に基くのである。経済學的競争の本質が競争單位数の制限を要求することあるは、後述の通りである。

さて我々は競争における三つの意味を上述の如く吟味し來つたのであるが、そこから得られた結論は要請としての競争、戒律としての競争及び制度としての競争の間に何らの必然的關係の存しないといふことである。^(六)然らば経済學上における自由競争はこの三者の中の何れを意味するのであらう。

経済學に於ける競争も、これを生産、交換、分配、消費の四部門についてそれぞれ吟味してみるならば、決して同一の理解があてはまるほどに明確なものではない。消費に關しては餘り自由競争といふ言葉は使はれない。假りに消費者の自由が語られる場合にも、現経済秩序の批判者との間にとかく意見の一致が生じ易い。ところが一度生産の部門に立ち據ると論者の意見は全く分裂して歸一するところを知らない有様である。交換と分配に關しても諸種の意見の存することは、ここに冗言を要しないであらう。然らば、ラッツラッフは経済學における自由競争の本質を如何やうに把握しようとするであらう。ラッツラッフが「生産要素の移動可能性」として之を把握してゐることは已に一言したところである

が、自由競争にまつはる曖昧を排除して來た前述のやうな彼獨特の分析方法がこの「移動可能性」に到達するまでも鮮かにみられる。その分析の過程を一つ一つに追つて行つて結論に到達することが、ラッツラッフに最も忠實でありまた同時にラッツラッフを理解する最も正當な態度であらう。紙幅の關係でこれを後日に譲らざるを得ぬ。尙ほ彼が自己の主張を経済學史的考證によつて基礎づけてゐる點も別の機會に紹介して彼の面目をつたへたいとも考へてゐる。後日を約して筆を置く。

註 一) Ratzlaff, The Theory of Free Competition p. 52.

(二) ラッツラッフが自由競争論の發展を跡づけるために取りあげる人々は、英國古典學派の人々即ちスミス、リカルド、マカロツク、ジョン・スチュアート・ミル、ケアンズ等、近代に下つては、マーシャル、ビグリー、更に古典派の正統に反對する英國フェビアン社會主義者、及び現代の英國社會主義等である。ラムゼイ・マクドナルドを初めコール、ホブソン、ヴェブツ等がその中に含まれることはいふまでもない。古典學派、新古典學派に關する彼の分析は後の機會に紹介してみたいと思つてゐる。

(三) Ratzlaff, *ibid.* p. 4. 參照。

(四) Ratzlaff, *ibid.* p. 52.

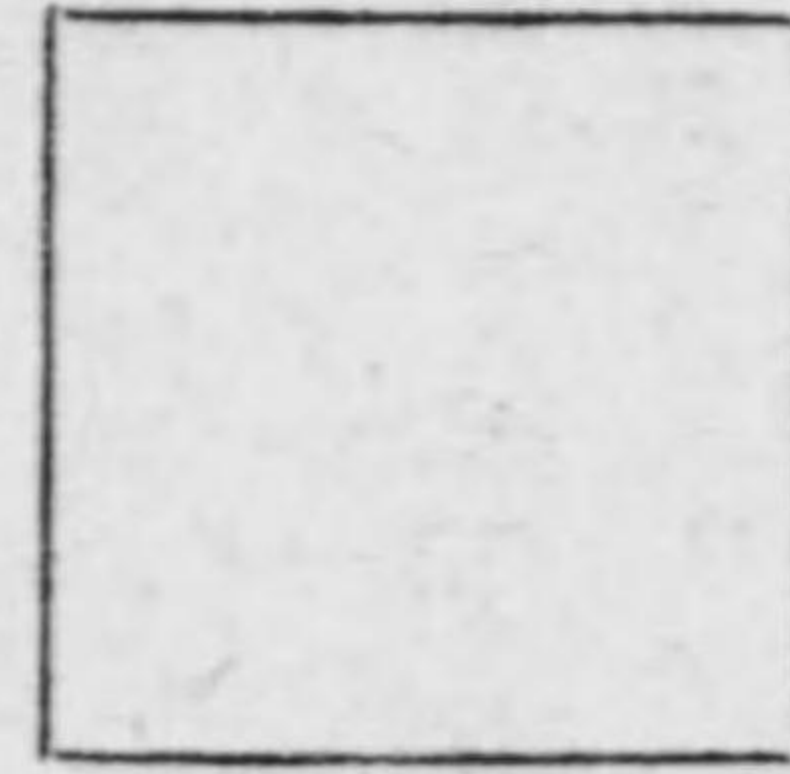
(五) Ratzlaff, *ibid.* pp. 9-15. 參照。

(六) Ratzlaff, *ibid.* pp. 15-22. 參照。

(早稻田政治經濟學雜誌第八十一號所攝)

經濟論理の再自覺

(出版會承認 58J098)



昭和十九年十月廿二日印刷
昭和十九年十月三十日發行(3000部)
●定價二圓四十錢
特別行爲 十五錢
稅相額額
合計二圓五十五錢

著者	杉山清
發行者	東京都京橋區銀座西一ノ三 増田義彦
印刷者	東京都小石川區音羽町八ノ二 和田高夫
印刷所	東京都小石川區音羽町八ノ二 新興印刷音羽工場 (東京六〇四)
配給元	東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給統制株式會社
發行所	東京都京橋區銀座西一ノ三 實業之日本社 出版會員三三〇六〇番 振替番號東京三二六番 電話京橋(56)五二二一五番

(小原製本)

3304

Su49(2)

